WASON
HQ
1104
J74f

Nov. 1890
no. 240

女學雜誌

明治二十三年十一月廿二日發行
第二百四十號
一冊六錢。每土曜日發兌

壯士論
第一帝國議會
戀愛解

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 240. NOVEMBER, 22ND. 1890.

第二百四十號目次

EDITORIAL :—Words to the Parliamentary Members.

MISCELLANEOUS :—Cut off our trace you who look for something that should happen! (San mikio jin). The Philosophy of Love, (Aigansei). Difference in the symptom of Consumptive desease in regard to their time, (Nitta Keijirō). The History of Japanese Picture (Suyematsu Kento). A few pieces of Japanese Poem (Junsan jin). Sketching on the Beach, (Tanabe Kaho). Various Thoughts (Unpōsh i). "Tobacco." (Sanka Sekiō).

NOVEL :—" The New Pilgrim's Progress."

CRITICAL NOTES : Mr. Inouye Sowtesu's Journal, " The Literature of To-day."

OPEN LETTERS :—

CONTRIBUTED ARTICLES.

NOTES AND NEWS.

CONCERNING WOMEN.

社説　帝國議會議員諸君に告ぐ○廢娼建白

雜錄　跡を絶てよ天下事あれさ望むの徒（三美卿人）●戀愛の哲學（愛山生）●男女によりて肺病の經過に別あると（仁田桂二郎）●日本繪の歷史（末松謙澄）●和歌五首（卯山人）●磯の筆草（田邊花圃女史）●雜感（雲峯生）●忘れ草（山下石翁）

小説　新天路歷程（湘川漁夫澤）

批評　井上正鐵翁在島記●今日の文章（下）

開書　女學雜誌第二百三十二號の寄書に就て辨する所あり（在神戶、エム、プロラウン）

寄書　近江婦人慈善會會頭岩崎滋賀縣知事夫人を訪ふ（う、まさを）

時事　紅葉季●田舍漢、都人士壯士さ三万圓●廢娼運動●慈善の事業●一文惜しみ百知らず●一夫多妻ならずんは不可●東京禁酒會●大日本教育會●議長論●女學雜誌

交詢　大阪鈴のや女史●天歷孤客生●不學者●野田氏に告ぐ

廢娼記事

通信

片々

週報

廣告

クリスマスと新年

面白くて、讀み易くて、繪入て、廉價で、良い本といへば、今度出來た、「かへる」といふ本よ、子供衆でも能く解るから、其餘の人は、誰でも解る、だから「クリスマス」や新年あその贈り物には、極々上々、早く買て贈り玉へ、何時でもかへる。。。と思ふて居る內に、「クリスマス」も新年も過ぎてしまうよ

一冊七錢（郵稅共）十冊以上一割引

發賣所

葡萄園　横濱千年町一丁目九番地

女學雜誌社　東京麴町區下六番町六番地

一二三書店　東京京橋區築地二丁目

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌

改進の廣告

女學雜誌平素の志望は今更に喋々せじ。其の何如にして生れ出で、又何如にして生ひ立ち、又々何如にして時勢の必要に應ぜしかの經歷は今又事々しく述ぶるとあるまじ。左れど、女學雜誌は、世に幾多の婦人雜誌ありて夫々の用を爲し各自の長所を發揮する時に於ては、彼等が爲し得べき限りは彼等の爲し得る儘に任せ、女學雜誌は敢て彼等が爲さゞる所ろを爲し、以て少さか女學界の欠典を補わんとせり。之が爲めに、女性に多く讀まるゝとを求めずと宣言せしともあり。又止を得ず新聞紙條例の下に立つて多少政論を試みんと布告したるともあり。女學雜誌が希ふ所ろは、婦人雜誌の万能膏たらんとを欲するにあらずして、其仲間のうちの尤とも爲し難き、需めの尤も狹き、随て賣高の至て少なき部分を望みて敢爲豪任せんとを欲するにてありき。一言するに、願わくは婦人雜誌中の改革者、即はち一方に於ける惡まれ者、又婦人雜誌中の先導者、即はち或意味に於ての孤立者とならんとを覺悟せしにあり。

此精神と覺悟とは今尚ほ勃々たり。恐らくは永遠に斯の如くあらんとを期望す。左れど、今や他の幾多の婦人雜誌落々として退々に失せ行き、僅かに殘る所ろの三種は、一は佛教を講ずるのみ、一は文章を掲ぐる耳、一は雜駁に只集むる耳なるとを思ふに於ては、女學雜誌は今や亦た更に一つの責任を負はざるを得ず。加ふるに女學生の半途にて學を休めしものも多く、又新たに女學の必要を説き聞かせねば成らぬ向も多くなれり。

要するに女學雜誌は其一半を割きて其二三年以前の昔しに立反り、即はち嘗て他の婦人雜誌なかりし時の昔し、又嘗て諄々として女學の必要を講述せし時の昔しに反へりて、平易に、且つ手廣に、四方に叫び聞こゆる所なかる可らざるの時節と爲りぬ。

故に、女學雜誌は、此際更に一段の改進を爲し、大率ね左の如き條々に於て大ひに變革する所ろあらん。

一　文字を平易にし、事柄を實際にし、尋常の婦人、及び女學に心得なき者にても、能く分るやうに諄々懇ろに説明する事。

二　故に女性の記者八名を新に聘し、家政、其他婦女子百般の心得を實際に説明する事。

三　左れど女學雜誌從前の躰裁を減失し去らんとを恐れ、毎月一回本紙半分の大附錄を添へ、大問題に對し大議論を爲すべし。

四　故に、平易及び實際となれる毎週の女學雜誌に、此の月一回の大附錄を併せ覽れば、從來女學雜誌の面目は一層煥發すると同時に、實用快樂の記事饒多に増加したるとを覺ゆべし。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌改進大畧

帝國議會の議事初めて催さるゝの日、日本の國勢將に一開變せんとするの初期日たる、十一月廿九日發行の女學雜誌第二百四十一號より、著しるしき改進を爲す。面目新らしく變はり、光彩一きは目立つとなるべし。

即はち、欄を、社說、言行、雜錄（集會談話の速記、訪問の記錄、反譯、其他樣々の項目を含む）、家政、小說、兒籃、批評、文學、理學、笑草、問答、寄書、隨感、時事、新誌、女報、週報、物價、統計、紹介、の二十欄に分ち、從來掲載したる項目の外に、實際の家政經濟取締の件、細君及母親の心得となる覺悟、佳人英雄善者義人などの言行、文學理學などの俗解、物のねだん、病人の取扱方、一切の女の心得向などを、尤も平易に且つ尤も面白く講述せんとす。

之が爲めに、從前の社員の外に、更に女記者八氏を聘し、各得意の欄に應じて秀妙有益の執筆を請ふべし。中島俊子女史は警拔俊秀の靈文を以て、時事問題を評し、且つ寸鐵殺人の短詩を以て同胞に警告する所あらんとす。若松しづ、田邊花圃の兩女史は、其純潔なる思想又は其才慧なる運筆を以て、各自特得の小說を起草せんとす。女子師範校の卒業生たり、日本女醫の破天荒たる荻野吟女史は、衛生、看病の項目を總ろに講話あらんとす。同じく女子師範校著名の卒業生にして多年理化學を研究し且つ長年之を教授ありける吉田伸子女史は、理學を平易に又樂しみ多く解釋せられんとす。明治女學校速記科第一回卒業生安藤たね子は、四方の有益なる講談會に臨みて、有益なる談話を筆記し、讀者をして坐ながら、諸大家の談話を聽聞せしめんとす。又た、家政學を學術的に講究し、我國に順序立ちたる家政學を創起せんとに熱心し、現に之を研窮し亦常に之を教授せらるゝ所ろの小島きよ女史に請ふて、家政及び兒籃に信仰あつき最と潔ぎよき說話を揭げんとを欲す。而して、淸水豐女史は、專ぱら、主筆、編輯の任に當り、全躰の責めを負はんとす。但し、巖本善治が女學雜誌に關係する所ろ敢て今日迄と異なるとなし。

女學雜誌は、今后如此く、平易に且つ面白くなるべし、左れば、性來不背の意見を棄てずして其改革主義の慷慨論あるとに愛顧せられたる讀者諸君は、如此き改進を以て或は不滿足と爲し玉ふともあるべし。吾人も亦之を慊む。故に、月一回の大附錄を添へ、之に於て愚見を十分に吐露し、女學雜誌相應の大議論を公けにすべし。

今后女學雜誌は、殆んど完備したる「家の雜誌」西洋所云るホーム、ジヨウナルとなるべし。而して女學雜誌が恐任したる社會改良的の慷慨意見ば、其間に輝々として輝やき、每月一回の附錄に於て更に大煥發するとあらんとす。其他一層細密なる躰裁何如あらんかは、第二百四十一號以后の雜誌紙面を見て希くは惠評せよ。

要目

女學雜誌　右每週各土曜日早朝全國に配布　淸水豐子編輯

附錄女學　右每月第一土曜日女學雜誌附錄　磯貝雲峯編輯

女學雜誌定價元の如し
一冊六錢、郵稅五厘、府內郵稅なし
十冊前金郵稅共五十八錢

附錄女學定價なし無代
但し直得意前金拂の讀者にのみ呈す

改進せる第一號に廣告揭載委賴の諸君は本月廿五日迄に申込あるべし

直注文せんとする諸君は今月中に申込まるゝ方便利なるべし來月初回の大附錄より順次に閱覽するとを得べければ也

女學雜誌、通信女學、女學生、發行所
東京下六番町六番地　**女學雜誌社**
女學書類出版所、同じく取次所

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌　第二百四十號　明治二十三年十一月廿二日發兌

社説

帝國議會議員諸君に告ぐ

以后三日、帝國議會の門戸開けんとす、四千万の同胞は、眼を高くして八方より望み瞰がふ。院内の光景果して何如があらんと。

蓋し、天に於ては此時聖樂香ばしき響を鳴り渡らせ、地下に於ては幾多の義人首の血を拭ふてほゝえむなるべし。吾等が仁惠ある　天皇陛下當年の御誓約は、今こそ成就しつれ。吾等が勇敢なる同志者の刑に屈し冤に殺ろされたる結果は、今こそ掬すべき味わひを供えつれ。議院の大門快ちよく開け、樂隊君が代を朗唱し、四民万歳を歡呼し、喝采潮の湧くが如くに起りて、全天全地、春の朝たの樂園の如くならんとす。吾人之を想像して快言ふ可らず。三日を待つ千秋を隔つるの心地す。

歡樂極まりて哀情なきに非ず。玆に至りて轉たゝ思ひの亂るるは、議場の出來ばえ何如あらんかと云ふとにあり。吾人が密々に聞く所ろによれば、政府も必らずしも平和の結果を信ぜざるが如し、而して民間一二の大政派も必らずしも平和に解散せんと思ふとあきに似たり。斯くして、共に常ならぬ行掛りのあらんとを心構へし、預じめ其準備を覺悟し、互に刄を懐ろにして相見んと欲す。之れ怪しからぬ事にして同胞共に痛哭し、先づ其事なからんやうに希願、切ならずんばある可らず。

天皇は神聖にして犯す可らず。政治上の事を論議するに當りては、吾人毫末も陛下の事に言ひ及ぼすとある可らず。但だ夫れ、官吏命を崇むつて内閣を組織し、相應の憲法と可也の制裁との下に立つて、民を支配せんとす。天日赫々なりと云へども、浮雲散じがたきとあり、賢明なる陛下の下に立つの内閣と雖ども、時に誤まりなくんばあらざる也。之を規し之を矯むるは、たゞ國會あるに據る。左れど、國會の議員必らずしも聖淨なるにあらず、平家倒れて源家代ると雖ども、鎌倉の天下決して至美至正と云ふ能はず、たとひ今の民間の志士、内閣に代ると云ふと雖ども、吾人は大したる變化のありと云ふとを覺悟せざるもの也。故に吾人は、藩閥を打破し、情實を去ると云ふことの爲めに、必らずしも今の民間志士を

雲の上に壓し上げんとを希はず。何んとなれば、此等の弊失は、上にあると共に下にあり、内閣にあると共に亦た今の政黨内に紛々擾々たるとを確知するがゆえ也。然れども、到底國會制度なかる可らず、國會あるは良友あるが如く亦た剛々たる諫官あるに均し。之によりて内閣を幾分か淨化するの効徳あるとは極めて確かなり。

故に、今の政黨員は、内閣に代はらんなどの卑劣心を起すとある可らず。是れ至つて恥かしきと也。内閣と議院と何れか重く、何れか名譽ある。輕重毀譽は地によりて生ぜず、人と業とによりて生ず。諸君議院を振り棄てゝ内閣に入るとも、如此き諸君は亦た内閣に落付くと能はじ。凡そ今の任を重んぜざるものは、亦た后の任を重んせず、今の地位に於て其地位を譽れあるものと爲さゝれば、后の地位を亦た譽れあるものと爲すと能はず。轉々つねに移任して浮草の如くあらんとも、終に何の効もあるとあけん。左れば、政黨員及び議員諸君は、其の今の地位を極めて大切なる者、名譽あるものと心得、夢にも他人の地位を羨やむとある勿れ。虹は觸るれば消ゆ、蜃氣樓は近づけば失せゆく。万事只だ望むによりて美なり。未だ現在己が存する所のものゝ如く適當且つ結構なる者はあらざる也。

かゝる端たなきとを心掛んより、議場に於ては眞の議員となり、誠實に能く議員たるの重任を果すべし。諸君は、陛下が其大權の幾部を割かせて民に集議の自由を許させ玉ふの第一議場に立出て、下民果して其御思召に適ふとを得るや否やの第一試驗に應じ奉まつるもの也。又諸君は、下民が此御思召を有がたきとに思ひ、恐懼信ずる所ろを陳述して上聞に達せんとを計るに當り、選ばれて其代言者となり、謹みて之を上申するの大役を負へるもの也。又諸君は、日本帝國が亞細亞洲裏に於て初めて國會の先例を開き、更に万古の歴史上初めて最と平和なる國會の第一摸範を開き、坤輿に驚ろくべき大光景を現ずるの曉に際し、其の第一回の議員として撰ばれたるもの也。諸君の前に日本帝國の議員なく、諸君の后に万代の后進議員あらんとす。諸君が行爲如何によりて、長年帝政の下に服したるものが、議院制度に適するや否やの大問題を決すべし。又諸君の行爲何如によりて、東方亞細亞今后の政治は何如に變革すべきやの方向を決すべし。又諸君が行爲何如によりて、日本人民は能く言論思想の自由國たるとに適する乎、若くは秦帝、カイザル、ナポーレヲンの下に永久服すべ

き乎の大議案を決すべし。大試驗に臨めるものは、大誠實あることを要す。諸君が一擧一動は、帝國と、亞細亞全洲と、全天下とに關して、莫大の影響あり。

諸君が輕々しく騷がざること、又非望を懷き浮々と內閣轉覆などの事を念せざること、共に何如にも願はし。然れども、亦た諸君が默々として、大事件を詰難論評するの勇氣あらざるに於ては、是亦同一に悲しむべきの事なりとす。諸君議場に出でゝ政府の短所を暴くこと能はずば、未だ初より出でざるに若かず、敵に向つて虛を示すは、初より之に對せざるを善しとす。諸君すでに人民の重望を負ひ國政議定の大任を擔へり。而して尙ほ政府に愚弄せられ、政府の言ふまゝに默隨し、肝腎の事に急所を刺すこと能はずして、たわいもなきことに八釜しく言はゞ、諸君が技量は、經驗ある官吏に見破られて、孺子與みし易しと嘲けられ、今后不當不正の元案續々として出で來ることあらん時何如に。諸君が議場に立出でたるは、寧しろ國政を害するが爲めなりと言はんに、何の不都合かあるべき。是れ豈に諸君自身、及び諸君を選びたる人々の素懷あらんや。

至誠よく天地を貫ぬく。況んや今の廟堂をや。諸君が政費を減ぜんと云ひ、地租を下げんと云ひ、條例を改めんと云ふ者、もし衷心誠情より發すとせば可也。苟くも民の不平に投じ、輿望の中心に射入し、以て一時の喝采を博して、万一の僥倖を攪取せんとするの野心に出づると亦無きにしもあらずとせば、其聲何如に高しと雖ども、響くにうはちに異ならず。啻に政府を服する能はざる耳ならず、民間の義人をも服すること能はず。空たる大言壯語は、阿房陀羅經と同運命に歸すべし。」

吾人は素より今の內閣に贊美歌を捧ぐること能はず、然れども今の政黨員にも亦た感服すること能はざるもの多し。吾人が今の政治界に對する眞情は、寧しろ絕望の方に近し。夏の帷子を脫して秋の袷子を着し、薩長を倒して、他の藩閥、他の黨閥を交代せしめたりとも、百姓の米一粒を增すにあらず、戶々のホーム美しくなるにもあらず、人物俄かに現出するにもあらず、風儀頓に改まるにもあらずと信ず。改革は上塗に異ある。眞誠の社會改良は根底より發し、先づ人心より改革する所なかる可らず。故に吾人が今の同胞に向つて熱告する所ろの者は、自づから他に在る有り。一つ二つの內閣を叩き、三つ四つ、政黨を責めたりとも、何の効かあらん。但だ希ふ所ろのものは、斯く計り目出度第一帝國議會に臨み、政府も政

三

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

黨も成る丈け喧嘩をする勿れ、銘々責任を能く盡し、政府は正直に會計上の豫算を爲し、政黨員は無理を言はずに相談に乘り、互ひに仲好くして政治を爲すの工夫をせよ、當分斯くして日本の政治を繕へよ、大改革は自から他に在りと言わんと欲するのみ。

但し此は政黨的の議員に向つて言へり。眞誠の議員、即はちたとひ政黨に入れりとも、其入れるを、民の爲めにして政黨の爲めにあらず、先づ民の議員たるとを第一の心掛にして、內閣に對するの政黨員たるとを后に廻すの議員諸君に對しては、望む所ろ重く、期する所ろ深し、諸君希わくは、其深重の大務を盡せ。コムト云く、人の爲めに生くるとは、即はち人に依りて生くるの謂ひ也と。諸君は、選擧者の爲めにのみ存するにあらず、亦た選擧者によりて生くる也。諸君にして若し其味を失わば、誰わりて之に代わらん。諸君が議塲に立つて辨ずるの時は、ゲスレリーが伯林會議に立てる時の如く、又た、ルーテルがヲルムスの會議に屹立せる時の如し。天の使は祈りつゝ眺むる也、惡魔は嘲けりつゝ窺ふ也、四千万の同胞は息を閉ぢて望む也、支那人は冷笑しつゝ睨む也。あゝ諸君の任重し、諸君希わくは努力せよ。

廢娼建白の請願に擬す

廢娼論の初めて起れる時、輕薄者は嘲けつて云へり、是れ只だ一時の流行のみと。然れども、流行は風の如く、吹き渡つて直ちに消ゆべし、廢娼論の日を追ふて彌よ燃ゆるは何にの故ぞ。去年條約改正の問題勃興するや、勢ほひ天を燒くが如く、全地悉とく火となれり。左れど一と度び治まれば亦た火氣なく、今年に至つては、けぶれる麻に似たり。獨り廢娼論の决して衰ろへざるは如何ん。思ふに是れ尋常一樣の慷慨より出でず、眞とに止を得ざるの憂ひに激するとあるに因る。蓋し今の廢娼論は、娼を全廢するに至る迄は决して退ぞくとあるまじ。故に亦た頓かに急き込むともなく、亦俄然蹟づくともなく、日の周り月の轉ずると共に彌よ進歩し、最終に最后の大勝利を得るとなるべし。而して其日あらんとは確かに數年の后に出でじ。吾人は之を確信確認して、敢て少さかも粗喪するとあし。左れば本年の帝國議會に向つては、先づ不正營業者の公務權を剝奪するとを請願するに止め、最始に律法上の根本を動かして而して后ち叙次に其全躰を顛覆するの畫策頗ぶる宜し。吾人試みに議院に請願するに擬せん。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

貸坐敷營業者及引手茶屋營業者を衆議院府縣會議員選擧權被選擧權より及市町村制公民權より削除し其他市町村の公務に一切關與せしめざる樣致度請願

謹みて申す、賣淫營業の汚らはしく且惡む可きとは、今更辨を待たざる儀にして、明治六年二月司法省第廿二號の布達にも、娼妓藝妓は人身の權利を失ふ者にて牛馬に異ならずと有之、我政府は夙に之を淫猥不正の營業として制裁の處置一方ならず、追々は全く之を禁止可被成御思召顯然にして蔽ふ可らざる儀と存候。抑も賣淫の罪は人類の弱點より發し、容易に絶滅すべきものに無之、隨つて私通賣淫の所行を悉く制禁するとは得て爲し難きものに候へども、其取締政策の宜きを得ると得ざるとにより、罪の增減に著しき影響を來し、隨つて一國風儀の上に至大の關係を及ぼすと勿論に候。現今賣淫の取締方に凡そ四の種類有之、第一は公けに許可して相當の管理を爲すと、例せば我日本及佛蘭西パリに行はるゝが如きもの、第二は、公けに許可せずと雖ども、密かに行はるゝを見て一切放任すると例せば英吉利及亞米利加合衆國などの諸州に行はるゝが如きもの、第三は其密かに行はるゝものに相當の取締を施し、一種の祕密營業として隱に嚴重の管督を加ふるを例せば獨逸國一二の都に行はるゝが如きもの、第四は公けに私しに一切の賣淫營業を嚴禁し、其業を落すのみならず更に其根を枯らさんとを欲するもの例せば蘇格蘭グラスゴーに行はるゝが如きもの、以上凡そ四の種類有之樣被存候。此内、全く之を嚴禁して一切の根葉を絶たんとするの處置頗ぶる有効にして、たとひ全く其罪を絶滅するを難しとするも、罪を減ずると著明なる趣き、實際に現はれて昭々消す可らざるの事實に候。次に之を密かにせしめ、密に取締りて其表面に現はるゝとを防ぎ、隱に梅毒檢査を施して惡病蔓延の害を防ぐの處置は、亦甚だ有効にして極めて望多き政策に候。然るに彼の公許賣淫の制度に至りては、害毒長久なるに減ぜずして惡弊彌よ增長し、風儀日に增し墮落し、惡病年々に蔓延して、到底罪を減ずるの見込毛頭も無之ものに候。蓋し賣淫公許の通柄には、密賣淫の行はるゝと一層太甚しきものにて、淫風は只だ妓樓妓館ある廓内にのみ閉こもるとなく、已が盛に吹渡りて全國に惡臭を流し、四民の風儀を一躰に破壞する夥しきものに候。此を以て只だ廓内に於けるの取締は、之より發して一般に流布するの毒影響を防ぐに由なく、之を公許して公けに取締り以て淫風汎濫の患を制止せんとするの處置は、偶ま以て淫風助長の惡結果を來すと、古今内外の實例に照し現然たるとに候。斯る不正營業を公認し、目下外交類煩の折柄、文明人往來の巷に堂々妓樓を設置せしめ、又其租税を以て政府歲入の公用に充つるが如きは、共に文明國の躰面に恥かしき儀にして、余所國は知らず、古來正義を以て万國に誇れる我日本帝國に其事あらんは、喩へば堂々たる士君子の面てに唾を點したるが如く、不面目無此上とに候。尤も、取締上致方なき儀に候はゞ、尙不得止と雖ども、此の公認制度は、四の制度中尤とも不都合なるものにして、其我國に行はるゝは、立案を佛蘭西人に任せ、例を佛蘭西國に採れるが故に由來すると尠からず、今日に至る十數年の經驗に徵し、彌よ其方の不可なるとを確認いたしたる以上は、速に改良の處置必要の儀と被存候。左れば先づ公許を廢して之を祕密の境界に追入れ、不面目の態を可成公衆の目前に示さゞるとを肝要と存候。是れ只管らに外飾の故にあらず、斯くせざれば、淫風は到底滅ぜざるが故に候。凡そ淫風を滅ずるは、社會先づ之を惡むにより、社會の之を惡むは、その之を恥づるにより、その之を恥るは先づ之を秘密にするより起るの順序に候へば、先づ賣淫公許の制を撤去して之を秘密にし、警察官管轄の下に於て、密かに取締相成候と至當且有益と存候。就ては右改良の第一着手として、斯る不正營業を渡世と爲すもの及び之に伴隨する業を營むもの等は、社會公共の事務に關與す可らざるとと定め、差向き、議員選擧權及被選擧權を剝奪せらるゝとに致し度候。彼等に此權を與へ置くは、即はち彼等に日本帝國大政の料理を委託する所以にして、身分牛馬に伍し、明治政府の眼下に於て既に畜生道に墮落せる非人類に對し此等尊重すべき權利を附與するは奇怪至極に被存候。彼等に此權ある以上は、即はち政治上堂々たる公民にして、内外に對し些かも恥づる所なしと覺悟し、或時は陛下龍臨の御前に立出で、又或時は撰ばれて議場に出席するとも可有之候。現に昨年右樣の事あり、至聖を瀆すと重大國事無上の事に候。若し彼等議員となり帝國議會に出席し揚々國事を論じ其論記して官報に掲載せられ万國民の眼前に出現致し候半には日本國の不名譽沙汰の限に候。たとひ然らざるも彼等もし其選擧權によりて同臭味の人を選擧し又黄白を散らして同臭味の意見を主張するに至らば何如に候や。然るに此如き事は既に所々に行われたる所の事實にして、議場と議員との神聖を之が爲に汚がし、日本立憲政治の歷史上千古拭ふ可らざるの汚點を遺したると少しとせず、殷鑑昭々として公衆の明らかに記臆する所ろに候。或人の説に、假令ひ不埒なる營業者と雖ども、政府の認許を蒙むりて、既に相當の租税を上納する以上は、税に對して權を受るは理の當に然るべきと也と云ふもの有之候、乍然神官及諸宗の僧侶又は教師は國に大益を爲し職務至て尊重すべきものたるに關はらず、尙ほ權の一半を所有不致居候、税に對して必らず政權を受るの理は政治上實際に行れざる所にして此尊さむべき人種すら尙然りとせば、不正營業を爲すものの權を失はんと固より構ひなき儀と被存候。左れば賣淫公許の制を全廢し、速に不正營業の跡を絶んと尤も願はしき限に候へども、第一回議會草創の時節に際し高議を煩はすべき要務至て多きとと愚考し先つ左の一事至急愚議あらんとを請願す、此は本年議員選擧の際、下名百千の者實地に弊害の太甚しきとを目擊し寧ろ一日も放擲致難きものと確認し、目下議事の輻湊を切に恐察するに關はらず請願の志望暫らくも猶豫難致早急上申仕候次第に候。

即ち法律第三號衆議院議員選擧法第四章選擧人及被選人に通ずる規定の中、第十四條第七項の次に、左の一項を追加せられん事

八　貸坐敷營業者及引手茶屋營業者

尙ほ同一の精神に據り、府縣會議員選擧權被選擧權、市町村制公民權より削除し其他市町村の公務に一切關與せざるやう以上評議の上可然立定被成下度謹で請願仕候敬白

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

雜錄

跡を絶てよ天下事あれを望むの徒

三美郷人寄

外務大臣が天長節の夕夜會を鹿鳴館に催すに當つて案内狀を國會議員に發するや東京青年有志なる名稱の下にて數十名の連名と他二百幾十名と記して平素政費節減民力休養の主義に反するを以て夜會に出る事を遠慮すべしとの文を封して之を各議員に送るのみならず三々五々相提携して會に臨むや否の意見を叩き詰たるむきもありし由初めには在京の議員は悉く訪問してその意を押し詰めるの目論見なれど時日なきを以て已みたりと聞きぬ余はこの青年諸士の擧動を見て強ち非難するものに非ず往事諸國に散在して頻りに夜會を攻擊非難せし諸士が今や外務大臣より案内狀を送りしとて魂飛び肉動くが如きは甚面白からざるを知るまた議員中昨は非難して今は魂肉共に動くが如きもののこれあるを知る其はとも角青年の壯士が各議員に對して出席は遠慮せよ否決して出席すべからずとの强談は無禮の極と言ふべし。

然れどもこの諸士が國を愛するの熱心より其無禮なると否とを顧みるの遑まなく迫てこれが出席をとゞめしとなれば余は諸士が熱情を愛して措く能はざるなり然れども余は諸士が誠實に國家を愛してかくの擧動に出しものに非るやを疑はざるを得ざるなり壯士中の一人の言なりとて聞きしに鹿鳴館の門前に立番して各議員の面の見ゆるあれば棍棒以て打伏するの覺悟なりと豫告せしとかこの豫告とかの二百幾十名の虛勢と其文意とは以て強迫の空氣を帶るものたるを知る今回の擧動を以て寬大にも美擧なりと認むるも平素諸士が目を鷲にし耳を兎にして美事と否との論なく世に凄しく騷しく見ゆる事には一番に飛出るを以て壯士の職分と爲す如き景勢を養成しつゝあるは甚國家の爲めに賀すべき兆候とも思はざるなり壯士あるものが天下の事々物々に助言し忠告して智者振豪傑振は余敢て咎めざるのみならず唯々諾々の世流に諸士の如き愕々の士あるは常に欣ぶところなり然れども忠告し助言するの士が忠告せられ助言せらるゝの士よりも資性品行劣れりとせんか忠告助言果して何の功かある壯士中には他人を忠告し助言するに足るの立派の士少くなしとせず而してまた言語同斷なる不立派の士も少くなからざる如きをしる若人を諫むるの德なくして漫りに先輩を輕侮し濶步横行以て壯年時代の業務

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

と心得その徒天下に播殖せば我國の前途果して如何且余は夜會を以て大層にも天下の害物とまでに思はざるなり余は夜會それ自身を嫌ふに非ずして唯夜會の仕方が日本に最も適せざるを嫌ふのみ夜會時としては朝野調和の一方便ともなるべきなり余は唯事に物に天下事あれ事あれを望むの徒の跡を絶ちて着實誠忠の士をして十分國家に竭くさしめん事を望む。

戀愛の哲學

在遠江　愛山生

司馬温公勸學の詩に曰あり、室中若未結親姻、自有佳人求匹配と、此二句必ず無數の青年を感發せし者あらん。男兒戀せずんば即ち已む矣、戀を爲さば須く天下第一の人となりて、天下第一の配を求むべきのみ。天の男女を生じて相愛さしむる所以の者、奚ぞ此に意あらざることを知んや。謂ふ勿れ人生沙漠の如しと、戀人の一笑は銷するに堪たり萬斛の愁。戀愛の勢力は萬象を顚倒して見へしむるに足れり鶴短、鳧長、鉤直、繩長、桀仁、堯暴、跖廉、夷貪、哀しむ者をして笑はしめ、笑ふ者をして哀しましめ、萬人を鏖殺し、萬人を笑殺す、其勢力や夷の思ふ所に非ず。人豈道理を學で而て后ち飲食せんや、嗜好に議論なきが如く、道理や經驗の堤防も戀に在ては到底三尺墻に如かず、若し戀人の眼を以て萬事を見ば戀は即ち萬事なり、萬事は即ち戀なり、天高、地濶、鳥飛、魚泳、戀てふ問題は此中に一貫して活動せん、自家亦其攝理中の一たらん。蓋し感情の中に道理なし、强て之を詰らば感ずるが故に道理なりとの答辭を得んのみ。若し天下の小艾に向て爾何故に吉士を慕ふやと難せば彼等必らず答へて曰ん、我彼を愛す、何となれば我彼を愛すればなりと。

若し戀を爲す人あらんか、彼其物躰の美を見るのみ、彼其四邊の萬物を忘れて一意其物躰を注視する耳、故にシェーキスピーア曰く戀は盲目なりと。

戀に男兒漢底の戀あり、小娘子的の戀あり、然と答ふべき場合に否と答へ、情熱する時に口を閉ぢ、飛ばんとする時に翼を收め、情の波動内部の劇甚なるとき、外却て粧得て平々凡々なるは小娘子的の戀なり。ロングフェロー氏詩中のプリスキラ孃は曰へり或る詰問の聲が其咀咒の沈默を破るまでは無言なる幽靈の如く默然忍耐して待つべきは女性の運命なればなりと若し夫れ輝ける金剛石の爲には硬き岩石をも折き、我戀人の爲には千山百嶂をも飛越し、萬頃の波濤をも渡り、膚を刺すの凌辱をも忍び、幽靈の恐怖をも去り、唯戀てふ

光明に向て猛進するは男兒漢底の戀なり、大なる戀の爲に小なる戀を消し、其救主の爲には千里の巡禮を爲すを辭せず自ら是れ英雄漢の事なり。

旻天に感謝すべきは戀てふ至大の動機を人界に與へて、之をも温かならしめ、活動せしめ給はる事なり。之を擴めて社會に及ぼし、渾て人類の團躰に及ぼさば、此天地如何ぞ有情天地ならざるを得ん。嗚呼人の心靈と身躰とに革命を行ふ戀愛よ。趣味想像の新しき境域を開拓する戀愛よ。英雄を作り豪傑を作る戀愛よ。家を結び國を固むる戀愛よ。余は大なる詩人出て、爾を書き過りし幾多の小家數を瞠若たらしめんことを望む

附言叢菊野史に一言を呈す　君の名久しく之を聽けり、今僕の爲に懇懃の言を賜はるを感謝す但し滿腸僕之を爲し能ふや否を知らず、褒辭は僕之を聞くべく好まず、加藤博士驚歎云々女學子聽過りしのみ、若し僕にして人に對し抗顔し得べきものあらば、僕は僕底の獨自一己を有す文に於ても行に於ても如此而已僕強て名を匿すものに非ず、強て名を署する必要をも感せず、謹んで答ふ、

男女に因りて肺勞の經過に別あると

仁田桂次郎

女子は肺勞に罹ると男子より少しとす、則ち英國肺勞專門醫ウイリヤムス氏が二十餘年間實驗して得たる統計に由れば、一千の肺勞患者中、男子六百二十五人にして、女子三百七十五人なり。是れ女子の爲めに祝すべきが如くなれども、女子は一旦肺勞に罹れば、治癒すると男子よりも稀れなり。男子平均二十九年、四七に於て之に罹れども、女子平均二十六年にして之に罹る。女子之に罹れば、其の經過男子よりも速にして、右一千人中より死亡者の經過を撿するに、男子の死亡者は百十九人にして、平均發病後八年四ヶ月、七二生存せり、女子の死亡者は、七十八人にして、平均發病後六年八ヶ月、六九生存せり。則ち女子は男子よりも經過短きと、一年半なり。且つ女子は肺勞に罹るは、平均男子よりも三年半早し。今ま男女が肺勞の爲めに死亡する年齡を擧れば、男子は平均四十年にして、女子は平均三十四年半なり、是れ女子は男子より早世すると五年半とす。又男子死亡者の五割は四十年以上なれども、女子死亡者中四十年を越ゆる者は二割九分あるのみ。男子にして六十年を越ゆる者九人、女子にして然る者十五人七十年余の男子一人、同女子四人あり。男子の大半は、三十年と四十年の間に死し、女子の大半は二十年と三十年の間に死す。是一千人中百九十八人の死亡者に就き、統計する所の者也。右を約言すれば、女子は肺勞に罹ると男子よりも早く、之に罹れば、經過男子よりも速かに、命數男子よりも短し。

女子は肺勞に罹るの患男子よりも少きに、其の經過の速かに

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

して死亡の早きは、何ある道理に原づくにや。女子特異の患たる經行不順、妊娠、乳養等は此の不幸を來すにや。又は女子の發成期は、男子よりも早きが故にや。若し前説を可とすれば、女子は肺勞に罹ると男子よりも多かるべきに、否ざれば後説眞に近きが如し。蓋し女子の發成期と、肺勞の發病期とは互に關係あるを信ず。且つ女子は身體弱きが故に、本病に耐へずして早く死亡するならん。

日本繪の歴史概略（三）　末松謙澄

駿河臺の狩野といふは其開祖を益信といふ此人は元と狩野とは申しませぬ狩野家の親類なる後藤玄乘光頼の子でありしを探幽が養つて自分の養子としたそれで狩野家を名乘るやうにありました其後探幽の細君が死んで再婚をして其腹に探信、探行など、云ふ人が出來ました探幽に實子が出來たから益信は別家して別に一家を興して將軍家の寵遇を蒙り遂に駿河臺狩野といふものを興すに至りましたのです朝鮮から使節の來りたる時此人に洞雲といふ號を贈りました併しこれは格別の畫家ではありません先刻述べた山樂山雪などと駢ぶべき人ではありませぬ。

それから話しが支道に入つて行くと海北家といふがありましたこれは狩野の門人でありまして海北の友松、友雪などといふ人がありました併し格別高名ではありません友松の書いたのでは襖の大へん大きい三番叟のやうな形ちの人物が多くあります。

又探幽兄弟の前に興以といふ人がありました此人は野州足利町の人でありまして探幽兄弟三人がまだ幼年の頃預つて世話をしましたとかそれで彼れ等が有名なる畫家になつて後ち狩野の名を贈つて其恩に報ひましたによりて狩野と稱す又探幽の門人に守景といふ人がある是れは恰も雪舟の弟子の秋月に於ける如くエライ人でありました又英一蝶といふ人があり北窓翁とも申しました一蝶は諧謔繪同前のものを多く書いた人ですが元とは狩野家の繪を書いた人で御坐います。

探幽は今より二百年計り前の人ですが今より百年計り前に世に大家の聞高き圓山應擧といふ人が出ました是人の畫は昨年上野に應擧畫展覽會もありましたから能く御承知で御坐いませう應擧は元夏雲又は仙嶺といひ後ちに應擧と改めました元土佐家の畫風を學びしが獨立して一派を立てました之を圓山流といふ或は應擧の弟子の月溪と云ふ人が京都の四條に居り此人が重に應擧の畫風を傳へしより師匠の應擧迄も込めて四

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

條風ともいふ四條風は寫生といふ事を務めて居りました即ち花鳥でも何でも眞に迫るやうに寫し出したそれゆゑに四條風は奇麗である併し應擧は中々の達人にして四條家と云ふては其名稱が小さ過ぐるやうに思ひます應擧の門人に蘆雪、源琦、皆川など丶云ふ人がありましたいづれも名があります又四條流の元祖は松村月溪と云ふ人です此人或る時攝州の五服といふ里の酒屋に宿を取ッて居た時酒樽の菰に繪を書いた處が主人が大變褒めたとか云ふとて呉服の里で春を迎へたから呉春ともいひます此人もよく繪をかきました此人が應擧に就いて先生の弟子にして呉れといふた處が應擧の答に君は其樣に能くかけるから私の弟子となるより友人となッて呉れと云はれたとか云ふくらひで御坐います此人から四條風が初まりました呉春の弟に景文といふ人がある又門人に岡村豐彥といふ人もありていづれも名があります。

此頃又凡そ圓山流四條風と同じ畵風の名人で森祖仙といふ人がある此人は若い時には祖仙と云ひましたが猿をかくとが上手にあッた處からでありませうか祖の字の偏をかへて狙仙と稱しました猿をかくとが大へん上手で日本で猿をかくのでは此人が第一等で御坐います併し猿の外の繪とても上手に出來たのがあります。

それから又謝蕪村と云ふ人があります元とは與蕪村と云ふて文人風の繪を上手に書いた人です又岸駒といふ人もある此岸駒といふ人は虎をかくのが上手でありました柳澤里恭といふ人もある通例柳里恭といひます此人も上手でありました。

後世になると谷文晁とか華山とか椿山とか云ふ樣な人がありていづれも大家です又司馬江漢と云ふ人もありました此人は初めは浮世繪かきであッたが長崎に往ッて油繪風を學びました銅版も此人が初めたと云ふ說があります其外文晁華山抔と同樣文人畵で名ある田能村竹田と云ふ人もあり又沈南蘋と云ふ人がある此人は支那の人ですが將軍家のお召しに依て長崎に來て居ッたといふ文人風の花鳥草花の繪では余程日本の畵家の利益になつた人です近頃では菊池容齋といふ人があり其前に北齋と云ふ人がありました北齋の繪は西洋人が尊びますが日本人は以前はそれ程に尊びませなんだ何ぜといふに此人は畵風が浮世繪めいて居るから御坐います此人は土佐狩野の風を學びましたのですけれども別に一風を出し町で子供が遊んで居る處でも何んでも目の前へのものを能くかいて御殿風などは余まりかゝなかッたから下品に見られたが西洋では

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

此人を日本屈指の大家として居ります極近來では猩々曉齋といふ人がありました此人はなか〳〵ヱライ先づ近比の大家と云はざるを得ずこれは昨年死にました。

それから一派違ッて俵屋宗遠緒方光琳などといふ人があります俵屋宗遠は重もに金泥をまぜてかきました其前に光悦といふて陶器をこしらへたり繪をかいたりした人があります光琳といふ人は蒔繪を良くしました光琳の弟に乾山と云ふ人がある此人は陶器が功手でありましたが繪も良く書きました光琳の流を汲んで酒井抱一といふ人があります是は酒井雅樂守の弟で嘗て東本願寺の僧となッて抱一上人といふ此人は此處に掛けてあるやうな繪をかきました宗遠は二百五六十年前光琳は百六十七年前抱一は五六十年前の人です又八九十年前に京都に伊藤若仲と云ふ人あり鳥蟲の畫に長じ特に鷄の畫に妙を得居ました。

僧侶の繪には前に述べし鳥羽僧正の外王代に在ては來迎佛に名ある惠心僧都又不動に名を得たる妙澤を忘るべからず妙澤は不動樣の繪が上手でありまして或る時天から不動の繪が舞ひ下ッて來たのを見て有り難がつて其後毎日一枚宛書いたといふ話しがあります後世に至ては松花堂昭乘の名が能く知れて居ります松花堂は男山の瀧本坊に居りしにより瀧本坊とも云ふ其外一休和尚澤庵和尚も畫を嗜みたりと云ふ。

女にては前に述べました土佐千代女の外に久隅守景の娘で探幽の姪孫なりし雪女と云ふは畫名を雪信と云ひ清原氏に嫁したり此人畫を能くして名あり通例女雪信と稱す其外加賀の千代女も畫を多少かきたりとか又大雅堂の妻玉瀾近き頃にては梁川星巖の妻江蘭共に其名を知らる。

浮世繪は又自ら一派をなせり浮世繪は是まで兎角上流の人の目につけられざりしも美術の點より云へば此流義の繪も全く棄るとを得ざるものなり只今日は委しくは申さず其尤も名人なるは岩佐又兵衛、夏川師宣、奥村正信、鈴木春信、宮川長春、勝川春章、北川歌麿、西川祐信、安藤廣重、倉橋豊國等です。

日本で有名なる畫家は大抵今演べました通りでありますあなた方が畫家の名前でも覺へておいでになれば前にも申す如く博覽會や展覽會を御覽においでになつた時など都合が好からうと思ひます畫家の名を覺るには此處に在る扶桑畫人傳と云ふ書物が宜しいと思ひます今日私の演べたとが幾分か御爲めになれば案外の仕合で御座います。

（完）

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

蟲　　郷山人

驛路もあれし野中の轡むしむかしに通ふ音にやなくらん

月前蟲

燈月の登るまに／＼浅芽生のむしの音高く成にける哉

荻

時雨ふる荻の上葉に風立て旅のね覺の寒き夜半哉

秋旅

さひしさに我を思ひて故里の妹も今宵の月やみるらん

折にふれて

たらちねのあつき心は旅衣寒き寝覺に思ひこそしれ

磯のふで草（五）

田邊花圃女史

おのれ大磯に在しある夜、二人三人の學生達、筆と口との功用につきて語り合へるを聞きしに、聞し事ありき、今その事ども、思ひ出るまゝかきつけて、此の記の終にとぢつゝく。ものいはねば腹ふくるゝわけといひ、又いへば唇寒しなど、いづれをよしとするやしらねど、かく文物ひらけ、萬事複雑に趣く世には、一時に人をつどへて、人々おもへる事ども、政事まれ、文學まれ、何くれとなく、數多くの人に訴へて、全意をもとめ、又おのれが信ずる事をかたくし、人の意見を聞て、他山の石となすなど、こよなきてだてなるべし、されば、かの、演説てふものは、則口の功用にて、尤其おもなるものといふべし、實にかの辯士演壇に立ち、滔々懸河の辨をふるひ、居丈たかく卓を撃て、世を憤り、或は聲あわれに手巾しめやかに、世を愛ふるなど、其音吐姿態抑揚頓挫、聽く者をして、唾を呑み、拳を握らしめ、又睫をしばたゝきて、思はず袖をうるほさしめ、満場百千の聽衆、寂として皆木偶の如し、是れ口の功用なるべし、されど又筆は、雜誌まれ新聞まれ、おのが思ふ事ども、書おほせて、よに公にするに當り、これを讀者夜窓更深け、燈影暗万籟皆歇精神獨明らかなるの際、反履熟讀して其利害と、得失とを細研精思し、果してその文字、我心を得たるものなれば、其著者の、今の人たると、古の人たるとを問はず、これを友とし、師とせんとまで思ひおこすあるべし、かゝる境界にありては、かの直接に其人の風采を目にし、その聲音を耳にせんより、却ておもひ深きがごとし、演説は一時人心を激昂し、殆んど狂するがごとく思はしむるも、熱するものはさめやすしてふ、たとへのごとく、時日を經れば、冷淡におもむく傾きなきにしもあらず。

人心の鏡明かなるの時に方りて、その感激憤慨の思をおこしゝは、骨に刻み心にゑりて、長く忘れず自然其方に心を用ゆるにいたる、これによりても、口の筆に及ばざるとわきらけし、演說と雖も筆してこれを記す時は、功用等しかるべけれど、もと文字と言辭とは、性質を異にすれば、傍聽筆記は、霞中の花影を見る心地して、精神乏しきを如何せん、されば口はその演者の容貌風采、幾分か其助けをなすものにして、口舌のみにては、人を感ぜしむるに至らざるを見るに足るべし、これを筆の獨立してもて、人を聞かず見ざるの地に感じさするとは、今日の論ならずとはいへど、この筆の功用のまされる万分の一だにも、おのれか拙なき筆にては、證するに足らざることそくちをしけれ

（完）

雜感（上）

雲峯生

文人の愛情

第十八世紀の中年に當り、英國に大詩人あり、一篇の哀詩を以て雷名を天下萬世に遺せり、名をトマスグレーと云ふ、彼博識多學なりし事尋常文人と日を等しくして語るべきに非ず、彼が哀詩の發兌せられしや否や忽ち板を更る十有餘回、外國の語に譯されし事凡そ五十回に及べりしとぞ、其世人に好尙せられし事推して知るべきのみ、されば彼が詩に巧みなりし事更らに疑ふべくもあらず、人或は云はん、彼かの一篇を作るに十一年の星霜を費せり、其巧妙絕妙なる至當ならずやと、然れども若彼をして凡庸普通の文人ならしめばヨシ數十年の歲月を假すも遂に詩を作すなけん、費せし時日の長短は問ふ所にあらず、其實相眞價のある所を見て云ふをこそ適中の批評と云ふべけれ、此に於て余は信ず、彼が一篇の妙詩を作せしは即ち彼の技量凡庸ならざりしを證するものなりと、思ふに世の人皆是を是と云はん、然るに彼が斯の如く大詩人なりしにも係らず、其著作の甚だ少なかりしは抑も何の故ぞ、バイロン僅に三十餘の齡を保ちしのみ、而も或は旅行に或は義擧に東行西歸に日も尙ほ足らざりし程なりき、而して彼の著作の多き事グレーに勝る幾倍なるを知らず、カークホツイト廿一歲にして長遊せり、彼不幸にして家貧しく父母の敎育少なし、逸才を抱ひて空しく製造場に活路を求めし事數年、或は家に止められ、亦は他人の書記となる等千障萬礙交も彼の進路を妨けて學に務むる能はざりき、然れども其の著作、書簡等は集錄して一冊子となれり、其他グレーに比して

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

齡少なきも著作の多きもの甚だ少なしとせず、されば彼が著作の少なかりしは如何なる理由あるべき、彼に一親友あり、是が理由を說ひて云ひぬ、彼は

情人なかりしが爲めなり

眞情にて愛する戀人なかりしが故に彼れの感情は遂に枯衰せり、幽々たる閑寺の坐隅に閉居し、蠧書虫の如く書物の間に起臥し、絕えて女子と交はる事なかりし、是彼が多くの著作を爲す能はざりし故なりと、或人之を評して曰く情人ある者必らずしも著作を爲し得べきに非ず、しか云ふ友人は情人を得て相愛し、相扶け、相慰めけり、而して何等見るべきの著作ありやと、余は此評の甚だ酷なるを見る、何となれば彼の友人が云ひしは單にグレーの一身に就きて云へりしあり、之を直ちに他に移して評し去るは無理ならずや、若人他家を是非せば先つ自ら行へと云はゞ世遂に批評家なるものなきに至らん、さは云へ、彼友人がグレーにつきて云へる事の果して當れるや否やは余亦知らず、されど人生れながらにして愛情あり、幼にしては父母を愛し、長しては妻を愛し、老ひては子孫を愛するは誠に自然の情なるが如し、若世に不幸の人あり、遂に終生愛する人を發見する能はずば遂に如何なる無情に流れんか、鰥寡孤獨の心曲りて邪見のもの多きは其愛の發露する所なきが爲めなり、淸流混々として流る、以て渴を消すべく、以て田圃に灌ぐべし、人爲めに活氣を得、草木爲に茂る、されど一度之を防塞し、行く能はざらしめば、遂に洋々たる大水とならん、其堤防を破壞して溢出するに當つては其害の及ぶ所實に甚しとす、感情を防塞する亦斯の如きのみ、

ジヨンソン

嘗て寂しさのあまり、嘆して云へり「余の生涯は甚だ乾燥にして快樂に乏し、余は眞に快樂を求む、責めては友人を得て相愛せんと、その知人彼が數人の婦人を交も愛せしを明言せり、然るに尙彼言を爲せり、其心の樣察せらるゝと共に余は人の愛情は抑壓すべきものならざるを知る、人或は曰く愛戀に陷るもの多くは懦弱薄行遂に無精神の如くにして終らんのみと、或は曰く「ホーム！」、其内には怠惰柔弱の意を含蓄せさるかと、余は今之に答て云はん、乞ふ古來の實例に徵せと、

ヂスレリー

曰く文人學者の勉强、幸福は大ひに家庭の生活如何によつて影響せらるゝものなりと、シエーキスピーア自ら經驗せる所を述べて云へりしとぞ曰く

"Never durst poet touch a pen to write,
Until his ink were temper'd with love's sighs,"

と、實に是千古不變の格言なり、古來文人と呼ばれ、雅士と稱せらるゝもの人を愛戀せざるは稀なり、思ふに世の千情萬感各々類を異にすと云へども、多少愛情に關係せざるものは少かるべし、今試みに一篇の小説を採り來つて讀め、其内に畫く所主客の間に生ずる無數の出來事あるが如しと云ども、歸着する所は遂に愛情に外ならず、其摸寫する境遇により、作者の如何によつて上下高卑の差別こそあれ、愛情てふ事を寫すに至つては變る事なし、亦趣向の如何により、直接愛情を摸寫するを見ざるが如き場合に於ても精細に讀み去らば間接に之に關はる所あるを見るべし、されば眞に愛情を知れる者に非ずして如何でか妙文傑作を作すを得ん、蓋し人の想像力は自ら經驗せる所若くは見聞せる所より廣大なる能はざればなり、若人情愛の他に發するなくば遂に憂愁に陷り、或は病を招ぎて非命に死し、或は感情枯衰して遂になす所なく無用の長物となつて世を終らんのみ。

(未完)

○わすれ草

山下石翁

煙草は、憂さの忘れ草なりとて其益を主張する人あり、是れ思はざるの僻言なり。所云る忘れ草にてある所ろ即はち其の害ある所ろなり。ほと〳〵仕事に勞れて退屈を覺ゆるは、身躰疲勞の明らかなる證にして、云はゞ立つて運動せよ、出でゝ遊步せよと云ふ天然の忠告の如し。左れば、此の忠告に隨つて遊步運動し、もて其の退屈を散らさんには、たとへば鬱積したる雲の開くるが如く、暫らくにして復たび天日を見るの心地せんとす。然るに煙草は與して此の天然の忠告を暗らまし、造化が嚴そかなる敎を賜ふに、頑として承わるとなく、其聲は沒し其刺擊は鈍くして不性に構へ、神經をねむくせて以て一時の安を貪ぼらんとす。此を以て、煙草を飲むものは自然運動になまけ、自づから出步るきを怠るの風あり、もし之を嗜しまざるものなりせば、氣分の鬱屈するまゝに直ちに飛出でゝいと快濶に逍遙散步し、以て精神を一洗すべきに、喫煙者は則はち然らず、いつも〳〵机に凭かゝり戸内に緩慢として追々に身躰を損ふに至る。左れば、憂さを忘れしむる所ろ即はち憂さを重ぬる所以にして、煙草に一の得ありと云ふの論點は、取も直さず其大害を證するの理由となる。

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

小説

新天路歴程

湘川漁夫譯

第三回　虚樂府

日もはや暮るゝ頃なりけり、滊車は轟き鳴りつゝ、名高き虚樂の會市府に入りぬ。此處に開ける虚樂の市は昔にかはらぬ賑ひにて、天が下あるとあらゆる、美しく華やかなる品物は、見當らぬといふものもなし。余は暫く此地に滯留の見込なりければ、此頃此府の住民と、外來の旅人との間に、和合整ひ、昔クリスチヤンを責め苦め、忠實を燒き殺したるが如き、誤れる處置の行はれざるに至りしときゝしは、余の頗る滿足せし所なりき。新に鐵道の開しより、商賣榮え、人口增し、市府の利益尠からざれば、此府の君は鐵道の保護者とあり、市中の資本家は多は其株主とあれり。多數の旅人も只歡樂或は利益のため、此市府に止り、中には此處こそ眞の天城にて、他にあるべき筈に非ず、此を置いて他に求むるは夢中に彷徨ふ人たるべければ、假令天城の光輝は、虚樂の門より僅に一里の距離にありとするも、此處を去程の愚人は非ずと自ら滿足する者あり。余はかゝる極端の意見を有せずと雖も、此地の住居の能く身に適し、住民との交際に、樂むべく學ぶべき事の數多きを覺えたりき。

余は元來沈着の性質あれば、他人の逐ひ求むる、浮きたる快樂の事よりは、物固き事を探らんと、專ら意を其方に用ひたり。バンヤンの書の外に、此府の樣子を聴かざる者は、其大なる變化に驚くなるべし。昔と異あり今は何れの町内も、教會堂のあらざるは少く、尊貴なる教法師の、此地の如くに敬禮を受るは、恐くは他に類なかるべし。其人々の唇より落つる、知識道德の金言は、深き精神の泉より出で、高き宗教の目的を指し、をさをさ古代の聖人にも劣らねば、尊敬を受べきは眞の價値ありと言ふべし。其證據として余は、淺淑浮加宗、妻月魔道、老年にて既に辭せんとする今尾維就、其後職となるべき足羽園時、其外、面井混亂、神氣鈍、又最も高名なる虚風空理博士の如き諸教師の名を引用すべし。是等の高貴なる神學者の働を助くる、多數の學者先生ありて、天にかゝはり地につける、深遠ある諸科の學理を講じ、人をして容易に百般の知識に接し、煩雜なる讀書の勞を省かしむ。されば文學は純粹ある精氣とありて人の口より出で、知識は(黄金の外は)

盡く其重き分子を沈め、浮き上りて音聲となり、人々の開ける耳に傳へ移れり。此巧ある方法は時を費やし、心を用ひずして、思想を練り、學問を學ぶ、機械の作用とも云ふべく、又此外に、人間社會の道德を製造する一種の機械法あり。此其法は様々なる德義慈善の會を設け、人々は只其水に連なるのみにて、折々道德の拔言引言を、其中に投げ入れ、會長及び幹事は、能く注意を用ひて、其集合律の應用を試るにあり。怜悧なる親友世渡滑の説明により、道德宗敎文學の驚くべき進歩を窺ひ知り、余は益々、虚樂府を慕ふの念を起せり。人間職業及び快樂の此大都府に係り、余が見聞せし事柄を、一々委しく記さんには、此小冊流行の時代に於て、大卷をなすの恐れあらん。此府内の住民には、智者あり、學者あり、權門家あり、財産家ありて、其階級限りなく、王侯、頭領、詩人、軍人、畫工、役者、慈善家等、皆貿易の市を張り、其好む所に隨ひ、品物の代價を定め、盛に賣買を行へり。人自ら賣買するの考なくとも、若し市場に至り、その實況を窺はゞ、益する所多かるべし。

買方の内には、余が考ふる所にては、甚た愚かなる交易をなす者あり。一人の青年は、大なる財産を身に受け繼ぎ、其多分を以て疾病を買ひ、他は皆後悔と襤褸とのために費やし終れり。麗しき一人の少女は、其貴き所有物と見ゆる、水晶の如き心を以て摩り切れ消えかゝり、價格もあらざる、同種の寶と交換せり。月桂樹及びマルトルの、冠を商ふ店あり、軍人、著述者、政治家、其外様々の人は、壓し合ひて其中に詰め懸け、或者は生命を以てし、他は多年の勞苦に引き替へ、多數は財産を犧牲にして、爭ひ求め、遂に冠を得ずして、歸り去る者多し。殆と何れの品物とも、引替の效用を有し、人の大に尊ふが如く見ゆる、良心と名づくる手形あり。凡そ高貴なる品物は此證券を費さずして、得らるゝ者至つて稀に、商賣の秘事は良心を市場に鬻ぐべき時と法とを能く辨へ知るにあり。去れど此證券のみは、永久の價格を有するものなれば、人之を離るゝ時は、竟には損失を全するに至るなり。商賣の中には其怪むべき者あり。折々其撰擧者を賣りて、己が懐を温むる國會議員あり、屢々低價を以て其國を渡す官吏あり。生命財産を抛つて一聯の鎖を購ふ者あり、時の奇を求めて、其幸福を費やす者、千を以て數ふべし。昔しの譬喩に隨ひ、一曲の歌に千金を投ぜんとせば、市中何處に至るも、必らず取引の客あり。煖かに煮えたる扁豆の羹は、家督の權を以て買はんとする者を待ちて、常に備はれり。左はあれ、此虚樂府

内の品物は、眞實の價値あるもの甚だ少し。人若し少年株券の切符を求むれば、商人は之に入れ歯と鬘とを與へ、心の平和を望めば、酒と阿片とを勸むる等の如し。

天城府の土地及び屋敷を以て、虚樂府の手狹き不潔不便なる家宅の借料に當て、甚だ不利益なる交易を行ふ事屢々なり。ベルゼブル王自らも、此類の交易を好み、折々身を顧みずして、小事に拘る事あり。余は或時王の、一人の吝嗇家に接し、互に長く競り合ひ、遂に僅に十錢の價を以て其靈魂を買へるを見たり。王は倚笑を含み其交易の利なきを語れり。

余は日々虚樂府の市街を歩行し、余が平生の擧動益々住民の氣風に似寄り、此地は本國の如くに見え來り。天城府旅行の思想は殆んど余が心中より滅え去らんとせり。余の再び之に氣づきしは、先に旅路の始めに於て、アポリオンの烟を吹きかけ、余等の笑ひ嘲けりたる、二人の順禮に逢へるに由れり。二人は靜かに虚樂府雜踏の中に立てば、商人は紫の衣、美しきリンチル及び寶石を勸め、頓智諧謔の者は戯け弄り、浮華ある貴女は只横目に見やり、余が益友世渡滑は其臂を引き、才智の金言を囁きて新に築ける堂宇を指せり。されど二人は、甚く此府の商賣及び快樂を斥け、益々混雜を釀さしむるに至れり。

此二人に逢ひてより、余が心中に起れる感情の、余が顔色に現れしを不思議にも早く見取りてか、直路守と名を呼べる、其内の一人余の方に進み來り、

君は自ら旅行者と言はるゝやト

悲哀を含めど又柔和なる聲を以て余に問へり。

疑ひもなく余は其名を帶ぶるの權あり。余は此虚樂府の滯留者にして、天城府への鐵道旅行者なりト

何氣なく答ふれば

噫余が友よ、余が言を聽け、是れ皆空しき泡沫なるのみ。君に千年の生命ありて、一生の間かゝる旅行を企つるも、虚樂府の先へは進み得ざるべく、其儘にして、徒に天城府の門内に入ることを望むは傷ましき心の迷なりト

守は說き、他の一人ある眞道歩も

天城府の君は、其鉄道に免許を與へ賜はず、免許なくては城内に入る事の協ざるは勿論なれば、切符を買へる者は空しく其代價を失へるのみ、其代價とは其人々の生命なりト

傍より語を挾めり。

如何なる無智の戯言ぞ

滑は大に聲を荒らげ己れ等誣罔の罪に處せらるべし。此の虛樂府に昔の如き法律の存ぜしあらば、鐵窓の鉄柵に繫がれ、其悶え苦しむ顏色を見たるなるべきにト言ひ捨て、余の手を執りて誘ひ去れり。

此一事は余の心中に深き刺激を與へ、余は其より虛樂府の永く逗るべき處ならざるを悟りたれど、未だ全く安樂ある鉄道旅行の念を斷ち、徒歩を試むる程の謙遜ある思ひはなかりしが、されど去んとする心は日を逐ひて益々加はり來れり。其內余の最も不快に感じたる出來事は、日々に過ぎ行く職業或は快樂の間に、宴會にあれ、戯場にあれ、會堂にあれ、富貴名譽の商賣の最中にあれ、如何なる障碍の時をも問はず、人は屢々泡の如くに消え失せて、再び形を現さざる者多し。住民は皆之に慣れ、事なきが如くに日を送れど、余に於ては決して然るを能はざりき。

第四回　終　末

余は虛樂府に留まり、計らずも許多の日數を費やし、又再び天城府に向て出發したるが、前に變らぬ、余が旅伴は、例の世渡滑なりき。虛樂府を離れてより程遠からず、一つの銀山ありけり、是は昔しデマスの發見せし銀山なりときゝしが、今も尙大なる利益ありて盛に採掘を行ひ、世界流通貨幣の大半を支ふべき分量ありといへり。尙行くと數里、一方に當つて柱の如くに立てるものあり。近づき見れば、災害を避けて逃れ出でたるロトの妻の、躊躇ひて後を顧み、其儘忽ち鹽と化し後世の旅行者の懲戒とありて永く存する標石ありけり。奇を好む旅人は、潛に小片を搔き取りて、持ち歸る者もあれど、余は却て思ひ當ると多く、心中大に恐れを抱けり。余は未だ全く虛樂府の快樂を忘るゝと能はず、身は車中にありて既に前に進み居れど、心は倘戀々として、後の方に引かされつゝありければ、もし嚴罰彼の婦人の如く余が身の上に行はれなば、余も亦後の鑑とあり、空しく一本の鹽柱となりたるべしと思へばなりけり。

次に余等の目に觸れて、最も心を驚かせしは、高く空中に聳えたる大なる城郭なり。其石は既に古びて苔生ひ繁れど、其搆造は近代の風を帶たるが如く見たり。滊笛は例の耳を貫く不快ある音響を發し、滊車は其近傍に來りて止れり。是れ昔し絕望大漢の住居せし疑念城なるが、彼れの死後獨信といへる者、替はり入りて、大なる修覆を加へ、旅客を

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

待遇すと懇なり、此處は余等の休泊所の一ありト

滑は余に對して說明を下せり。

此城の建築は堅固ならざるに似たりト

余は巨大なれども甚だ脆弱に見ゆる石壁を眺めつゝ

余は潮信氏の住所を羨まず、或る時必らず大石の頭上に頽れ落つる懼れあらんト

語り出だせば、

何は兎もあれ、余等は其氣遣ひなし、アポリオンは今出發の用意をなして、蒸氣の力を加へ居れり。

滑は言へり。

道は迯に樂山の麓を過ぎ、昔し數多の盲人が、彷徨ひ居りたりといへる、墓塲の迹を橫截り、滊車は速力を加へて進み行きしに、何人の悪戲にや、墓石を軌道の上に倒し懸け、列車は其上に乘りかゝりて一度大に跳り揚れり。山の嶮しき一方に當り、半は葛蔓に閉ぢられ、其隙間より烟の漏れ出でゝ微に見ゆる錆びわたりたる鐵門ありけり。

あれは牧夫の、地獄の、裏口なりと、クリスチャンに語りたる門ありやト

余が問ひ尋ぬれば、

其は牧夫の戯れ談しなりト

滑は笑ひつゝ

彼處は彼等が羊肉燻製に用ふる洞穴の口にして決して他に非ずト

更に又落着きたる樣子して答へけり。

暫くにして、余の旅行の記臆は、亂れ來りて定かならず、道は今迷原に入り、氣候頓に變り、吹き來る風もあまり温かに、睡魔身を襲ひ、心神倦みて堪へ難かりしも、平安道に至るに及び余は再び起き上り、心は漸く元に復しぬ。此時旅客は皆目を擦り時計を見合はせ、旅路の終りに近づけるを祝し互に大に喜びあへり。爽かなる風は香を傳へ、銀の泉は光を放ち、天城の公園より移し來れる美はしき樹木は生ひ繁りて、其葉緣りに、其果甘く、此地の歡樂實に譬ふるに物なし。滊車は旋風の如く走せ入りしが、空中には天意を傳へんとや、羽音高く、飛び舞へる天使あり、須臾にして滊關車の方より滊車の最終の停車塲に着するを報ずる、滊笛の聲鳴り來れり。其恐ろしき最後の一聲は明かに區別し得べき痛歎、悲哀、激怒の聲と惡鬼又は狂人の冷笑の聲とを打ち混ぜたるが如くにて、心肝に響き渡り凄さと實に聽くに堪へざりき。途上是迄アポリオ

ンは、巧に術を用ひて、其不快なる音響を抑揚せしが、此終りの一回に於て、遂に自ら制する能はず、平安道の平和なる住民を驚かせしのみならず、天城の門をも衝き破りたるかと思はるゝ、地獄の音聲とも言ふべき亂雜不調の音を發せり。此忌はしき惡音は、余が耳底に止まりて、未だ消えやらざりしに忽ち數千の樂器其調べを合せて、或は高く或は深く、樂しく美はしき妙なる音の凱歌を奏で、空中に澄みわたりて聞えたるは戰場を踏み、勝利を得、榮と譽を身に荷ひ、武具を捧げて、入り來らんとする、大勇の戰功者を迎ふるもの丶如し。余は心に奇異の思を起し、何事ならんと車を下り、前面に横たはれる川の彼方を眺めやれば、遙かに岸邊に立ち連なり、輝きわたれる、人々の、今しも水を渡りたるかと見ゆる勞れ果てたる、二人の旅人を迎ふるなりけり。余は眸を凝らして尚能く見やれば旅人は旅行の首途に、余等がアポリオンと共に笑ひ辱かしめ、又虚樂府に於て、浮虚の快樂を貪らず府民の嘲弄の中に、固く正義を守り、余の良心に強き刺激を與へたる、彼の二人の順禮なりき。

好くも彼人等は入り行きたるものかなト

且つ讃め且つ羨み、余は却て自ら疑ひ、

余等の待遇も亦斯くあらんとを望むト

語り告ぐれば、

氣遣ひなし、氣遣ひなしト

余が親友は早くも諾ひ、

いざ疾く來れ、滊船は直ちに出發すべし、三分時にして、君は向ひの岸にあるならん、馬車は必らず君を迎へて城門まで載せ行くべしト

尚語を續けて答へけり。

天城旅行中の改良進歩として見るべき、終りの物なる小蒸滊船は烟を噴き、唸り吼えつゝ、不快なる音を發し、出發の近づけるを報ぜり。余は急いで船中に飛び入りしが、旅客は皆大に狼狽し或は聲を限りに其荷物を呼び、或は髮を挘り、滊船の破裂若しくは沈沒を恐れて泣き叫び、或は川浪の高きに色を失ひ、或は舟夫の兇惡なる容貌に肝を冷やし、或は迷原の夢、未だ覺めずして神氣尚確かならず、其混雜實に言語に餘りありき。余は何心なく岸邊を見返り、意外にも親友世渡滑の其上に立ち、手を動かして送別の意を表するを見て、不審さに堪へず、

君は天城府に渡らずやト

忙はしく問ひ懸けしに
オー否ト
滑は頭を掉りて、奇なる笑聲を發し、又更に
オー否、余は只君の道伴となりて是迄遠く來れるのみ。君の幸福を祈る、何れ再會の期あるべしト
言ひつゝ、死の陰谷の住民に、曾て見たるが如き容貌にて甚しく、顏を曲め、氣味惡き高笑をなせり。其時此の愛敬する親友が口と鼻とより烟を噴き出だし、目より焰の迸るが如く見えしは、明かに其心中に烈火の燃ゆるとを證するに足るべし。破廉恥の惡漢よ、己が心中に焦熱の苦みあるを知りつゝ尙地獄の存在を否むとは。余は急に跳り出でんと、船の片側に寄り進めば、車は既に廻轉を始め、氷の如き波を余に打ちかけたり。死の自ら溺れて、力を失ふに至るまでは、其水に伴ひて離ざる此冷氣は今骨を徹して余を侵し、余が心は動き、余が身は震へ、余が魂も將に消なんとし、忽然として目覺ぬ、我に返りて思を回らせば、天に謝す、皆只一場の夢なりき。

廢娼運動に對する寄附金續々來る。次號に取まとめ廣告すべし。尙ほ有志の人は多少に拘らず熱志義捐せよ。

批評

井上正鐵翁在島記

禊教(トホカミ講)の教祖、井上正鐵翁が一生の記にして、特に其の伊豆三宅島に遠流せられたる間の行狀を精しく記す。所謂る禊教の旨とする所は、儒佛によらず、直ちに神祖天照皇大神の御教へに基づき、神ながらの趣きにかなひて人々本然の自づからある所ろに反へらんとを欲するにあり。聲を出して強く叫ぶは、先づ息を鼻より吸ひて腹に滿たし口に吐き、僧侶の所謂る坐禪の心地をもて胆を練り心を靜るの法とす。斯て、邪念を抑へ、慾情の源を枯らし、以て良心を發揮し、至誠に通ずるにあり。要するに、智を用ひざるの禪法の如く、又た二宮氏盛んに唱道したる報德論の主旨に髣髴たり。云はく、孔子の言ふ一貫、皇國の唯一、念佛門の一向一心、外へ心を散らさず、神勅を忘れぬが大切なりと。其唯一とは、心を一つにし、一向らに神意に通ぜんとするにある也。上州の門人澁澤六左衛門に答へたる文の奧に(二六六頁)、

扨て古今の序にも、一つ心を種として見るもの聞くものに付て云ひ出せるなど書候。ありがたき事に御坐候。此の一つ心を人の心と后の人誤まりしと見へて古き本には一つ

とあり、此つの字のの字と見誤まりしなるべし。猶歌道奥意知らざる人には、一つ心にては分り不申、故に人の心に誤まり候と思はれ候、又歌よむものは多けれど、其心を得るもの少なしと書れしも有がたき事なり、此一は信心の一つ事なり……。貫之も、躬恒も、此一つ心を得給ふて、歌よみ玉ひしなり。花本大明神、此心を得て、又發句に作り玉ひしなり、發句は見るもの聞ものの身にふるゝものに付きて、發明し玉ふを言ひ出せるや一に發句なるべし、發氣と云ふ心を句に作るなるべし……。

說の當れる當らざるは暫らく言わず、亦以て此教の道德に掛念する切なる所ろを諒察するヿを得べし。

之を公平に考ふれば、日本神代の人民には、眞の神と云へる思想至つて精しからず、ことに崇敬の念に乏しかりし如くに見ゆ。神代の巻に見ゆる神とは即はち人の事にて、新井白石が言へる如く、神は實に人と云ふに同じきものなりけん、但だ金の奮ぶるに隨つて古色を帶び蒼然たる如く、此の文字后の世に至りて自づから神々しくなり、遂に眞の神に似るものゝ如く、迷信せらるゝに至りぬ。左れば、天照太神を信じ、もしくは其他の八百万の神々を信じて、もて眞神に對する如き崇敬心を起さんとするは、只だ方便に過ぎず。眞を言わば、何々の神と云ふは何々の業を爲したる人と云ふに外ならず。能く古事記を讀むものは、何人と云へども其眞意を如此く解せずして止むヿ能はず。

故に、吾等は、此神々を崇めて眞の神とするヿ能はず。左れど人到底神を敬せずして終るヿ能はざるが故に、未だ眞誠獨一の上帝に來向せざるものは、切めては此の昔しの先祖たちを神とも見て、人間自然の崇敬心を寄せざるを得ず。而して斯く假に歸して其崇敬心を捧げ奉まつるの徒すら、其盲行尚何ものをも信ぜざるの輩らに優る。蓋し人は到底ヲルシップ(崇拜)すべき動物にてあるがゆへ也。

此書を讀みて、ことに此の理わりに感ず。人みな善心あり、之を伸せば聖に近づくヿを得。又至誠天地に通ずるときは、山川も所ろを變へずと云ふヿなし。正鐵翁が雨に祈りて雨忽ち降るの類ひ、必らずしも妄りの事と爲す可らず。惣じて深く道に志ざし、人情のありさまに注意するヿ淺からざる者は、かゝる書を見て大ひに發明する所ろなくんばあらず。

次號に文學史下巻及クロムエル傳を評すべし。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

今日の文章。（下）

撫象子。

時事翁と中江篤助君（前は翁 后は君）

文思
- 着眼 理想
  - 富と金。平和と満足（昨）。
  - 道理と自由。革命と破壊（中）。
  - 欧米の中間人、物質的の文明。
  - 個々の自由、道理界。

文氣
- 不平
  - 金のなき學者、實際の出來ぬ理想、官員の威張、國民のコリ性。
  - 貴族的、面倒くさき事、虚飾的、万事に道理のなき事。
- 熱心
  - 熱心ならざる熱心。石炭のふすべる如し、切迫せず。
  - 絶望的の熱心。火山の石の躰あり。
- 眞實
  - 方便。ポリシー。時に随て更る。坊主の説教に似たり。
  - ヤケ酒のみで慷慨するの狀あり。

文粹
- 効力
  - 一々尤もと言はしむ。
  - 其情に泣かしめ、沈鬱悲憤に同情ならしむ。
- 秀所
  - 平凡卑近、何人をも感服せしむ、大コンモンセンスあり。巧妙。
  - 世俗界の神韻餘りあり、横に天使を飛ばしむ。沈鬱。
- 欠點
  - 義人を服する能はず。
  - 實際眼の人を服する能はず。

文字
- 結構
  - 平々叙し去り結構を要せず、辨の行くまゝ。
  - 鬱思憤慨の迸ばしるまゝ、情の行くまゝ。
- 文法
  - 商用文、心學道話文、人情本文。
  - 佛文、漢文。
- 措辭
  - 俗語艷光あり、俗語多し、字々餘情あらしむ。
  - 俗諧主角を生ず、漢語多し、字々穩當よく直立す。

地位
- 經歴
  - 洸學時代、反譯時代を過ぎ、言文一致代にうつる。
  - 未だ大に現れず。
- 現今
  - いつもよろし。
  - 未だ可ならず。
- 前途
  - つれによろし。
  - 文趣の更に解さるゝと共に現れん。

要括
- 批評家
  - 評家ならぬ如くして評家、つれに用ひらるべし、望む所は、富と、人情と、歟。
  - 批評家らしき批評家、其言到底用ひられず、望む所は、自由と道理と人情。
- 文の韻
  - 冷嘲　算盤を以て、實業家らしく、書物を以て、哲學家らしく、世の中は然らずとて、悟僧の如く。
  - 不切迫　愚民多しとて。敗軍の將の如く。

開書

○女學雜誌第二百卅二號の寄書に就て辨ずる所あり

在神戸　エム、ブラウン

綠村女史の寄書に對し左の辨駁書來りぬ。はじめ彼の寄せ文を掲ぐるとき、かゝる事は間違やすきものにて、不平の人反つて誤解よりするやも知れずと思ひ、切に吾人が意見を問ふと記しありしにも關はらず、最も淡泊に添ことを致しぬ。之を以て或人は書寄ふせ、吾人を冷淡なりとして促がし玉へるもありき。かゝる因縁もあれば、今ま、ブラウン氏の私書を得たるま　直ちに譯し、開書として此に掲ぐ。彼此に對して辨ぜまく欲するがゆへ也。

九月廿七日發兌の貴誌に於て一書を拜見しぬ、其指摘せし所の關西なる某女學校に關する許多の評言甚だ慘酷に失するものありき、思ふに記者足下は彼文の記草者の誰たるを知らん、亦如何なる學校に對して評言せしかをも知らるゝならん、必らずや我神戸英和女學校に關する事ならじ、されど彼の評言は何處の女學校にも適用し得べし、故に世人の誤想して以て我女學校に關すると爲し、彼の起草者は我女學校の名譽を害せんと企てし者なりと思ふ人少なからず、此に於て妾云はんとす、若彼の綠村女史が心中暗に本校を指すものならんには必らずや、我校を好まざるに出でしなるべし、彼女史が記せし如きは妾も甚だ惡むべき事と思ふ、此點に於ては女史と異存あるなし、されば斯る事の何れの學校にも行はれざらん事を切望に堪へず。

女史が記する所を約言すれば左の三項に歸するが如し、第一宗教上の厭制なり、成る程本校に於ては生徒をして或集合に出席せしむるの規則あり、されど生徒各自及び其兩親等は生徒の入校に先だち預じめ是を承知する筈なり、然れども若生徒にして病氣あるか若くは明白の理由あるあらば欠席の許可を得る甚だ容易なりとす、決して感話若くは祈禱を爲せと壓抑する事なし、時に依ては生徒順番を以て主會者となる事あり、されど主會者の爲すべき所は只讃美歌を撰みて會合者に歌はしめ、而して感話若くは祈禱を爲さんとする者あれば（會合者の内に）爲せと望むのみ、必らず爲せと云ふ事なし、加之生徒に平常告げて云ふ、兩親の許可なくんば決して洗禮を受くべからずと、而して今日迄其許可なくして洗禮を受けしもの一人もあるなし、されば何人も本校に於て宗教上の壓抑行はるゝと云ふ能はざるべし、若云はんには其人誤れるのみ。第二、教師が生徒の書簡を開封する事　本校に於て書簡に關する制規は次に云ふが如し、若曖昧模糊の手紙來る事あれば、其封紙に記する人即ち其手紙を受くべき人を呼び、何人より來りしやを問ふ、其云ひ解く所明白ならんには直ちに手紙を渡す、若説明にして明白ならずんば受信者に開封せしめ、一人或は二人の教師傍にあつて讀ましむ、（傍觀する教師は通常二人とす）受信者の不在なるに際し、手紙を開封せる事は七年間に只一度の

み、其時にも決して教師の勝手に爲せしに非ず、數人の生徒及び其他の人々の前にて開封せしなり、而して其手紙は實に汚濁の文字ありて之を受くるは、學校も生徒も等しく不面目なる程なりし、其他教師及び受信者立合の上開封せし事も七年間に數度のみ（原文にはvery very fewとあり）而して是等の手紙は皆嫌忌すべきものなりき、未だ嘗て一度も誤つて正當の手紙を立合の上開封せしめし事あらず、思ふに世の父兄諸君は必らず其令孃の爲めに其信書上に教師の注意するを希望せらるゝならん、亦若不都合の手紙來るも之を撿せずして渡すを好まざるべし、若我等生徒の手紙に對して注意するなくんば世人の非難を蒙る事、今日注意の過る爲めに非難せらるゝより甚しかるべし、今再たび云はん、受信者が教師の疑團を解き得ざる時に非ずんば、其受信者の面前に非ずんば決して開封する事なし、緑村女史曰く若疑はしき手紙あらば何ぞ開封するに先きだつて發送者に返さゞると、されど疑はしき手紙に限り、發送者の名判然認めある事なし、如何で返戻するを得んや。

第三の點は學校が生徒の手紙に對し、不注意なるが故に較もすれば失ふ事ありと云ふに存す、本校に於ては七年の間に只一封の書を失ひしのみ、然れど是とても後に發見して受信者に渡しぬ、彼書は如何にして起りしか今記せず、爾後一層の注意を爲す事となれり、只一度の過誤を以て本校には常に斯かる不注意の事ありと記し、亦世人に思はしむるに至つては酷なるも亦極れり、今日に於ては先づ配達人より郵筒に受け、更らに是を他の鎖させる箱に移す事とす、されば手紙を失ひ若くは盜まるゝの憂ある事なし。

是に附してブラッン氏が女學雜誌者に計る教師養成の意見あり、次號に譯載すべし

譯者記す

寄書

近江婦人慈善會々頭
岩崎滋賀縣知事夫人を訪ふ

う、まさた

大津町の東端小高き處、滋賀縣廳前の一角、新築にかゝれる中洋中和の一家屋は、之なん滋賀縣知事の第宅なり、已れ先頃事を以て大津にあるの日、僅の閑暇を得て之を訪ひぬ。

玄關に入れば、著袴せる取次の人直に出て來りて、懇懃に來意を問ひければ、刺を通じて知事夫人に見へんことを求む。取次の人奥に入りしが、やがて出來りて、こちらへと請ぜらるゝまゝ、廊下を通りて奥に入りぬ。廊下の右方は凡て洋風の建築にして、其左方は純然たる和流なり、已の導かれしは其後者の廣間にして、床間に掛けしは古法眼の三幅對にして、銅盤に投入られしは參差たる菊花なりし、之と相對して二大額面あり、「天向一中分造化、人於心上起經綸」となん書せり、無名なれば其何人の手になれるものなるやを知るによしなきも、頗る氣韻ある書風なりし。坐上いと厚き段通織を敷きまはし、座蒲團、火鉢、烟草盆など、程よく列びてありぬ、已れ坐に就きしとき小女出で茶をすゝむ。

やがて出で來られしは夫人なりし、

夫人は年齡三十四五にして、一瞥直に其奥樣風なることを認む、服裝質朴、擧措優美、寧ろ活潑、眼光鋭くして、其相話するや、兩手を膝上に直立せしめて微笑を洩しぬ、言語甚だ謙退にして、應接頗る上手なり、さすがは東京の交際場裏を踏みもて來られしによるならんと感心せらる。已は先づ、

婦人慈善會の近況如何

と問ひければ、夫人は、此地に來りて日未だ淺きがため、僅に二回のみ相會せし程なれば、未だ事情に通ぜず、故中井知事婦人の時には餘程盛なりしと聞きしが、中には退會せんとするものも起りしが、そは全く會員の華美を衒ふ風あるによるとのことなれば、近頃は相會するもの、成るべく質素を主としたれば、今日にては婦人のことなれば今少しは飾りてもよきものをといふ程になりぬと答へられぬ。

目今の運動如何

縣下至る處に支部會の設もあるが、只今定りたる働としては、毎月一回相會して、德育、衛生等の講和を聞くことにて講師は京都本願寺より來るとて、その運動に就き多少の批評を試みられしを承れり、（該會が貧病者を救治することは、女學雜誌二百三十二號に報道せしを參考あれよ）此外、該會過去の歷史、維持方法、以後の設計、基督敎に對する夫人の意見等を聞きしに、靜に且つ懇にその高見を示し給ひしが、そを公にせんことは德義上憚あれば遺憾ながらも割愛しぬ。最後に、該會の歷史並に本部支部の統計等、詳細を知りたくば、幹事に紹介せんと申されければ、其厚意を謝し、その書附樣のものを得て退りぬれば、夫人立て送り給ふを辭し、更に取次の人に送られて玄關を去りぬ。かくて直に該會幹事の一人なる竹内邦育氏を訪ひしに、未だ縣廳より歸らざる旨を傳へられしを以て、重て訪はんとを言殘して、旅寓に歸りぬ、されば後日を約してその詳なる模樣を報道せん。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

時事

○紅葉季

葉の紅なゐするに當りて、國民蕾を破らんとし、樹梢心ぼそく落葉の時、議會まさに花を開かんとす。今年のこしもがれは最とにぎやかなり。

○田舎漢都人士

三百の議員東京に入り來る。吾人は寧ろ北方ゴッスの徒が羅馬に入れる時の如く、亦た木曾義仲が輩らの都に登れる時の如く、少しは優柔なる都人士が習氣を化するとあらんと希ひたり。左れど彼等は鹿鳴館に於て仲々巧者に立まわり、都の酒宴に於ても二とは下ぬよし。都門一進の機は何日の事にや。

○壯士と三万圓

壯士中に、眞壯士あるは勿論なり、左れど三万圓に動かされて口を箝する如きの輩は、素と在りて甲斐なきの男子なり。此際眞誠の愛國心を發揮するは眞誠壯士の職分あり。而して彼等決して默々せじ。果して然らば、三万圓の下渡しは、何たる鎭定策となるともなけん。

○一文惜しみ、百知らず

福澤翁が例の說法に云く、人世は當に一文惜しみの百知らずなるべし、一文の錢は謹しんで之を大切にし苟くも棄つ可らずと雖ども、之を積んで家を爲したる上は、時として大に財を散ずるの覺悟なかる可からず、と。

○一夫多妻ならずんば不可

帝國大學教授內藤恥叟氏が、教育に關する勅語奉讀の會に於て演ずらく、家督爭ひの爲に亂を起すと多きは何故ぞ、必ず一婦を限りて多女を許さゞる故に此亂階は起るとなり、況んや我國は尤も系統を重んずるの國なれば一夫一婦など云ふ說は尤とも習俗に適せず、大に國躰にあたらざる邪說也、青年學者迷はさるゝ勿れと。然らば、日本の國躰は一夫多妻主義にして、一夫一婦を重んずるは青年の誤まりある乎、あゝ是れ日本人民の稅によりて生存する帝國大學の教授が青年子弟に教ゆるの言なりとす。

○東京禁酒會

同會には從來會長なく數名の委員にて共力し來り、如何にも物足ぬやうの心地なし居たるに、此度び安藤太郎氏會長となり、根本正氏副會長となり、會務肅然として整ふに至れりと聞く。是れ大に賀すべき事なり。府下の如き酒弊汎濫する

の地には禁酒の事業容易にあらず。然るに今ま、安藤氏の熱心と、根本氏の老實とを以てし、兼て津田仙氏の遊軍として助力せらるゝものありとせば、何如なる酒魔と云へども辟易せざることあらん。大に賀すべし、大に賀すべし。

○府下に於ける廢娼運動

府下の廢娼熱心者は、過夜衆議院議員中の同志者を富士見軒に懇待し打合せを爲しぬ。席上、島田三郎、湯淺二郎、植木枝盛、中村榮助、江原素六、加藤勝彌、下飯坂權三郎、立石岐、長世忠明の諸議員、德富猪一郎、津田仙、本田庸一、小島官吾、高田耕安、平岩恒保の諸氏、其他の來客一々意見を吐露し、議會へ對する運動方を約束す。又同志者は二派に分れ、一は全廢の意見を以て、他は不正營業者選擧權剝奪の希望を以て、二通の請願書を差出すことなれり。左れど與に共に運動し、廣く議員を歷訪し、尙ほ世上に向つて大に訴ふる所ろあらんとすと云ふ。

○大日本敎育會

會長辻新次君に向つて敎育功章を呈したるものあり。惣じて恩に報ゆるは善きことなり。左れば大日本敎育會に於ても更に一層働らかるべし、めうがに適ふべき也。

○議長論

追々八釜しくなり、最早堂々打あけて論表するものすらあり、中に就き讀賣新聞の論と、兆民居士のとは、一きわ目立ちて面白し。迚も孔子に似ん程の人はあるまじ。左りとて河野君が源氏の御大將と見へ、又た楠本君が頭を振ると云ふ丈けにて、選ぶとも出來まじ。左れど、此邊の所ろ大抵遠からざるの當りと云ふべし。

○女學雜誌

忍月居士の評に云く、彼の文學を愛しながら常に却つて文學を誤まるを以て有名なる女學雜誌記者と。此記者は果して文學を誤まるの罪人なるか、そは數年后の問題なるべし。兎に角、今の文學界に餘り好かれざるとは確かにして、而して特更ら好かれんとを好かざるとも亦た確かなり。

○慈善の事業　　ふみ子

自腹を痛めず手足を勞せず面白半分人の袋中を弄し而して幾許の金錢を得て之れを人に施與するも以て慈善といふを得ば慈善は餘り立派なることには非る也殊勝なる事とはいふ可らざるなり此頃慈善の市を開きたるものあり盛粧炫服四邊を輝かすの婦人三々伍々相群りて其間に周旋すと雖も賣る所の品は彼等婦人の情の手に成り愛の泉に湧きたるものに非ず而して之れを冗談半分强て他へ賣付けんとす二八の處女は爲に顏を赤らめて逡巡し輕薄才子は婦人に引張らるゝことを喜びて買ふべきものをも態と一應二應にては買はず是に於てか洋服の袖にすがる令夫人もあれば羽織袴の紳士を追掛くる令孃なきに非ず逃ぐる人追ふ人共に其何の爲なるかを忘れたるが如し之れを或人々の熱腸より開きたる慈善の市としては嚴正を缺きたるの嫌なきに非ず吾人は此等の會の開かるゝを喜ぶと仝時に又其緋義万端の其神聖なる名に背かざらむ事を願ふものなり。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

廢娼可決(神奈川電報)

文論

み、れ、

●大阪鈴のや女子　御尋ねのヶ條は何でありましたか失念致しましてすみません實は答へをする人は過般代つたので貴暖が御問ひになつた事は多分私の受持つ前の事でしよふ、少々探しましたが分りませんから今一度精しく御問ひを願ひます、知る丈けは答へます

●天涯孤客生　第一文學を修むる學校は錦城學校か專門學校が宜ひとの事です、入學試驗も君の所謂面倒なるものはなきよし○英語會話だけ殊更に學ぶ所とて存じません、是は西洋人に就くが良法です、何れの學校でも全く試驗なくして講堂に出入を許るす所とてはありますまい○徴兵猶豫の事は知りません○御問ひの英文學者の著にして歸書はまだないと思ひます

●不學者　御問ひの如く精しき生理書は日本書ではありません、よきものと云つても英書若くは獨逸書の精しきもの程精しくありません、到底一二小冊子は學びても得られますまい○顔に付ける藥は「グリスリン」と云ふのが宜しひとの事です○鼻の事何か御病氣であろうと思ひます、病氣が治らぬ間は治りますまい

●野田氏に告ぐ　或人が下の如く云ひ來しましたから掲げます

●野田氏に告ぐ　女學雜誌第二百三十七號交詢欄内にてミ、子、君が野田氏へ「速記器學院の規則を御覽になるのが宜しい」とお記しになりましたが、あの規則を御覽になるなら、同時に速記彙報の十九、二十、二十二、二十三に掲げてある「日本速記器學院院則に就て」と題する文を御覽になることを望みます、速記彙報は府下神田裏神保町一番地速記彙報發行所で發賣し一冊の價八錢です、速記學院の院則バカり御覽になるのはおタメになりますまい　(ヌ、ㄧ)

●廢娼記事

○神奈川

いよく隆んなり、存娼論者反動して起り立てるほどなり縣會には建議書出で、佐々木笑三郎、熊野雄七、松井菜等は議員を歴訪して之に勸告す。

○越州

黒川に北越廢娼同盟會の本部ありて各地に支部あり、新津に廢娼同盟會あり、立田に青年會あり、互に聯合して目下彌よ勉力す。

○日向

高鍋に新に青年會起り、廢娼を論ぜんとす。

○甲州

新海榮太郎氏外運動ますく激烈にして、八代郡に於ける前年の藝妓退斥論者一齊に山梨廢娼會へ加名するに至れり。

通信

盛岡通信

(十一月十三日發)

盛岡婦人會　明治二十一年七月設立になり當今會員四十名計りあり目的とする所は修身衛生家政育兒法及裁縫飲食物調理法等其他技藝を修め婦人の品位を高むるにありて會員は既婚の婦人特に官吏の細君多くあり會長は石井あつ子副會長二村さく子幹事長岡ます子青柳しげ子本堂たよ子等なり毎土曜日集會して裁縫編物料理等を習ひ時には講師を聘して演説講談等を聞くとあり

東北盲人教育岩手分會　同會は近來の設立にして當時會員及贊成員募集中なり盲人の技藝を改良し學術を研究し風教改良起業奬勵等にあり盲人阿部良済氏の發企によりて坂井喜悅氏外四名の幹事及其他の役員あり會員は本會員專習員慈善員贊成者に分ち維持金四千圓の見込を以て贊成者の一時寄附慈善員の積金を醵集し居れり慈善員には盛岡市參事會員其他の紳士にあり專習員は少年者にて道德醫學及按摩鍼治等の技術其他學問を教授するものにて來年一月より始むると云ふ

片々

●傳話交換所　龍の口の傳話交換所には婦人の技手六名あり目下專ら此婦人等が傳話の技術を施し終れりと因に云傳話の技手となるには別に六か敷修業を要するに非ず三四週間計りも修業したる後は一に其習熟練磨を要するのみなりといふ

●米國の女權擴張會　米國マスチツセツ州は新世界中人智最も進歩して社會の改良に向つては頗ぶる力を盡す處の由なるが同州の女權擴張會にては本年十月廿八日第十期の報告會を開き其席上にては古來各國に於ける婚姻の風習を報告し巴比倫にては婚期に達したる國内の婦人を鬻賣所へ寄せ集め賣買したる事もありしなど各國の弊風を擧け女子の不幸に沈み居ると半開の國々にては今も尙ほ甚だしき旨を報告し大いに會員の感動を惹起したりと云ふ　(自由新聞)

●外國人の茶話會　米國東洋艦隊司令官ヘルナツプ氏夫人其の他の貴夫人は去る十三日午后より英國公使館へ參集し茶話會を開きたるよし

●教授任命　高等師範學校助教授篠田利英氏は女子高等師範學校教授に任命せられたり

●女學生の及第　東京府廳にては女子高等師範學校撰擧生試驗に付尋常師範學校の課程を終りたる資格者を試驗せしに左の如く及第せり

宮崎ふつ、二淵ひの、橋本なか、高橋増江、兵頭梢、種村ゆき、小穴いち、小泉てる、大久保うめ、鶴田たみ、木原八重、平松葛尾、鳥羽松江

●婦人白倶樂部　にては去る十四日銀坐教會に例會を開きたるに席上德富猪一郞植木枝盛兩氏の有益なる演説あり會員外の傍聽者も二百余名ありたり

週報

宮廷　十五日天皇陛下大山邸へ行幸。

政治　十七日貴族院に伊藤議長始め副議長書記官長有爵勅選兩議員諸氏會議を開く●十五日改進黨の諸氏江東中村樓に會し懇親會を開く。

教育　十五日小川町なる東京師範學校附屬小學校開校式を擧ぐ●十四日東京府廳へ各郡區役所學事擔當書記を招集して協議會を開きたり●十六日十二大學聯合學士議會を大學講義室に開く。

雜報　十五日大日本通俗衛生會總會を神田明神社内開化樓に開く●十六日厚生舘に代議士の演說會を開く傍聽者千二百人●十七日國華新聞發刊。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

本校の學期は豫科三箇年本科四箇年にして別に二箇年に渉る高等科の設あり入學生は寄宿生百三十五名通學生百名を限とす毎科受持の教員孰れも熟達善良あり然して本校の教授は實に完全なりとの世評を獲んとは本校の希圖する所あり規則書等御入用の御方は校長宛に御照會を乞ふ

麻布區鳥居坂十四番地

東洋英和女學校

●〇脚氣患者諸君よ左の〇●

廣告を讀んで世に名灸有るを知り玉はんことを

●官許專門 天下無比 **かつけ根切灸點術**●

附言輕症は一二度如何なる重病と雖ども四五度限り全治受合〇灸治効能男女を論せずかつけは勿論腰より下の冷て痛む病よ大効ある事受合論より證據實驗あれ〇當時拙家近邊よ類似の家號名乘る同業者出來たるに付番地家號篤と御注意の上陸續御來車あれ

京橋區本材木町三丁目二十一番地松屋橋通り

壽福堂

女學生第七號

いよ〳〵進歩し一層の快姿を裝ふて去二十日發兌したり。

通信女學講義

家に在りて獨學する工夫之に優る者なし、一冊卅二錢宛。

農學士寺尾熊三先生著 **植物學**

今正に植物の採集及び研究の好季節也、一冊十五錢。

女學雜誌社廣告

本日婦人矯風會演説

午后二時より番町教會に於いて

辨士 **金森通倫君**

傍聽無料 慈善部發起

診察

每日午前

外神田和泉橋通松永町廿三番地 **渡邊泰**

殊に **女學生** を優待し、別室を設け、尤も信切よ診察すべし、尚學業中餘資なき人の爲に自由治療す。

〇肩掛

〇フラ子ル

〇膝掛

歐洲製

流行新柄各種

廉價販賣仕候

東京市南傳馬町二丁目十二番地

三木商店

●正教新報

第貳百三十九號十一月十五日發行〇壹冊郵税共金四錢五厘

論説 謹みて去月三十日の聖詔を拜讀す〇井上哲次郎氏の耶穌教談を評す〇新教徒聖人崇敬を排斥するに至りたる理由●特別寄書〇井上哲次郎氏の宗教論を讀む **雜錄**●愛國心●詞叢〇金言四則信者相互の注意〇**雜報**●日本正教會記事●漫筆〇隨感隨筆〇正教大言虎唱を戒む〇數件

發行所 東京神田區駿河臺北甲賀町十三番地 **愛々社**

發行所 東京市麴町區下六番町六番地 **女學雜誌社**

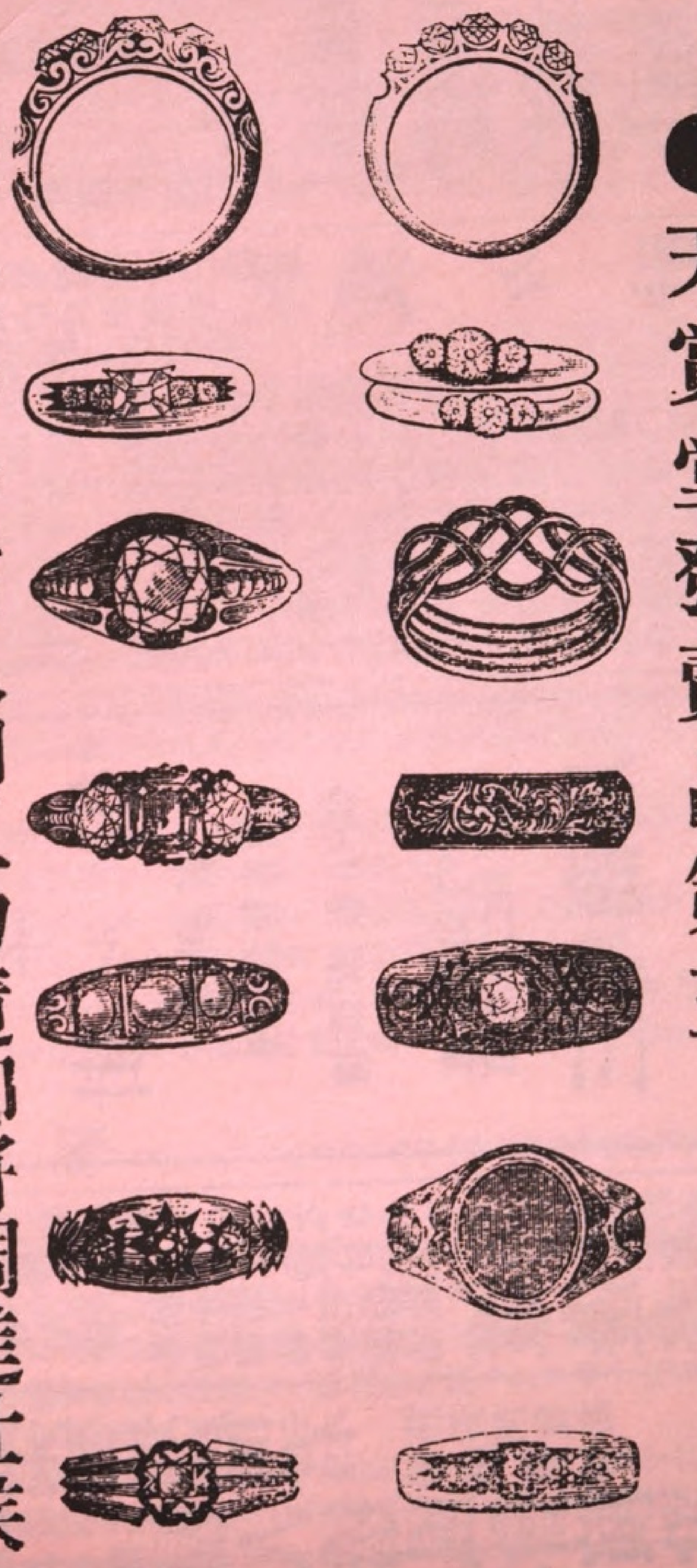
編輯兼發行人 巖本善治

印刷人 堀口庄三

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

●天賞堂發賣品第三　指輪ノ部



此他貴金屬及寶石入細工物隨御好調進仕候

天賞堂時計發賣廣告

瑞西國ヂイベル、ブレンアルド横濱新九十番商會專賣に係る時計の精巧堅牢なるは江湖の熟知せらるゝ處弊堂該商中時計數十種中に就き左の八種を撰擇し廣く之を發賣す

(金側)丁價六十圓十八金廿一形片硝子持出し付金針入龍頭卷懷中時計器械本ニッケル卷上げ聲向ひ爪左アンクル二番より惣石入●丙價七十圓同裏三枚蓋●乙價七十五圓同無雙●甲價九十八圓同裏三枚蓋●各器械構造概略圖の如し●府外遞送費廿錢●(銀側)丁價八圓片硝子廿一形金針入鍵卷懷中時計器械プラチナ滅金向ひ爪左アンクル●丙價十一圓半同龍頭卷向ひ爪右アンクル●乙價十五圓同本ニッケル卷上げ聲二番より惣石入●甲價廿一圓同七所金●各器械構造概略圖の如し●府外遞送費廿錢

右時計は器械の堅牢なる弊堂が說明を待たざる處なり然れども特に御請求の分に限りて左の手續に從ひ正確の保險状を呈すべし○保險を要せらるゝ場合は御購求の當時と既に御購求の後に在るとに拘らず各一個に付左の保險料を申受べし　一金側金五圓　一銀側金二圓○保險年限は特は金銀時計共二十一箇年を以て限りとす○保險年限中は無代諸器械及び硝子の破損修繕掃除油さし磨き直しの手入は無代價とす○保險年限中自然器械の變化を生じ到底使用に代へざる事あれば何時たりとも同種にして新規なる者と交換又は原價の返却をなすべし●保險の有無に拘はらず**御購求後三十日以內に限り交換又は原價の返戻を要せらるゝときは其望に應ずべし**

今回又左の時計及時計附屬品各種を發賣す
●但し時計は保險手續其他總て前文による

米國製

(金側)十八金廿一形無雙龍頭卷懷中時計價九十五圓●同十四金價甲七十三圓●同乙六十三圓●(銀側)同價廿圓●同片硝子價拾五圓(金着側)同無雙甲價廿九圓●同乙價廿五圓

瑞西國製

(金側)十八金廿一形無雙懷中時計器械本ニッケル卷上げ聲向ひ爪左アンクル二番より惣石入價六十五圓●同十四金價四十九圓●同十八金裏三枚蓋價九十二圓●同日指し及七曜付價百四十五圓●同コロノカラフ引打月の滿缺十二ヶ月七曜及日指し付價三百五十圓●同十八金十三形(貴婦人持)無雙懷中時計價廿九圓●同裏三枚蓋價四十五圓●同片硝子價十七圓半●同無雙金剛石裝飾付價六十六圓

時計附屬品

鎖及磁石寫眞入鉛筆其他各種

●指環

及黃金製見留印付寶石入各種

東京日日新聞評

○天賞堂の時計　時計を以て有名なる京橋區尾張町二丁目十八番地の天賞堂にて此程より發賣せる金銀時計は歐米製造數千百種の中につき特に器械裝飾の善良なるものを撰擇せしものにて從來舶載の物に比しれば堅牢精緻なる由にて同日の談に非ざるが如し殊に時計に附し丁寧親切なる心得書を添へ又二十年間の保險を附し購求後三十日以內は物品の交換原價の返却をも爲し客の望に任するを云へば自然適意の品物を入手するを得べきなり前日來の廣告につき其詳細一覽あるべし

時事新報評

○天賞堂ノ時計　尾張町二丁目ノ天賞堂ニテ發賣スル時計ハ何レモ機械ノ堅牢ナルモノヲ撰ミ購求者ヘ取扱ヒ方心得書ヲ添ヘテ且ツ買取後三十日以內ハ交換或ハ原價返却ヲ求ムレハ其望ミニ應スルトノコトナリ

朝野新聞評

○天賞堂の時計　印刻を以て名ある尾張町二丁目天賞堂にて發賣する時計は各種の時計中に就き特に撰擇せしものにて在來の時計に比し機械も餘ほど堅牢精巧なるよし一個每に取扱心得書を添へ且購求後三十日以內は都合に依り交換又は原價の返却を求むる時は其望みに應ずる由

東京京橋區尾張町二丁目十八番地
天賞堂

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

其望に應ずべし一
の返戻を要せらるゝときは
日以内に限り交換又は原價

御購求後二十

天賞堂時計發賣廣告

朝野新聞評

時事新報評

東京日日新聞評

天賞堂

此他貴金屬及寶石入細工物隨意御好調進仕候

● 天賞堂發賣品第三　指輪之部

Nov. 1890
no. 241

女學雜誌

明治二十三年十一月廿九日發行
第二百四十壹號
一冊六錢。毎土曜日發兌

女子脩身論（松村介石）
家政の教（中島俊子）
小供の談（小島きよ）
薄命（新小説）花圃女史
風船の話（吉田のぶ）
女文學者（清水豊子）
女學反對論（巖本善治）

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY